

俳句雜誌

令和四年八月一日発行（毎月一日発行）通巻第九十五卷第八号

水 明

2022 8月号



《今月のかな女》

仕ふるや香華に秋の立つも知らず

(句集『龍膽』)

長谷川かな女

立秋の頃、かな女が最も心を寄せていた人の霊前に香華を手向けているのであろう。その心を誰に捧げているのかを考えると、答は亡き夫である長谷川零余子に行き着いた。昭和三年七月二十七日の深夜に亡くなった亡夫の遺骨がまだ柏木の自宅にあり、霊前で一心に焼けているかな女の姿が浮かんでくる。葬儀から忙しい日が続き、気がついたらすでに立秋が過ぎていた。

(鬼之介・註)

水 明

第1103号

— 華の一句 —

雲ひとつなき日のマラソンや夏柳

篠崎 紀子

マラソンのシーズンは冬から春、そして秋かと思うが、東京オリンピックピツクと同様に夏はかなり過酷であろう。本句に書かれているように、一片の雲も無い快晴の夏の日であれば、追いつ追われつの選手の形相も厳しいであろう。救いとなつているのは、コースの沿道に大きく枝を広げてさやさやと揺れている葉柳の姿である。葉柳の癒しに選手各々の心が和み、ゴールを目掛けて力走する。

(鬼之介・推薦)

水明

令和4年
8月号

今月のかな女

華の一句

昭和の音(作品)

蛍狩(近詠)

銀座点描(近詠)

風 琴 雪欄作家近詠鑑賞

硯 箱 季音月評

季音「雪」(同人作品)

季音「月」(同人作品)

季音「花」(同人作品)

『水明誌』を繙く

現代俳句鑑賞

山本鬼之介

鳥津初花

境延昭

町野広子

井口俊晴

小倉倭子 栢尾さく子
菊池ひろこ ほか

井上燈女 丸山マスマ
鳥羽和風 ほか

河野はるみ 野田静香
青木鶴城 ほか

高岡修

網野月を



☆新珠賞受賞者ノオト

○自選二十句

花開くとき

○自選二十句

たぶん、嘗ては文学青年か

○自選二十句

更なる精進を

森美枝子

境延昭

元田亮一

網野月香

後記朝香

青木鶴城

水明集

山岸久美子
反町修

村杉清吉
ほか

水明集作品評

水琴窟 (水明集六月号鑑賞)

山本鬼之介

山紫集

池田雅夫

鼓笛集 (同人作品)・私の一句

俳誌望見

梅澤佐江

水明の記事他誌転載

近藤徹平

句集喝采

78

水明例会報・各地句会報

りんどう忌のお知らせ

風声・発展基金御礼

後記

題字…長谷川かな女 表紙…内田恵子 カット…福田千春

昭和の音

山本鬼之介

車夫憩ふ目抜き通りの夏柳

旅ゆけば大和一望夏霞

背負ふチェロ担ぐカンバス緑蔭を

思ふひとなれば日傘を差しかくる
打水もさすが「一力」申の刻
天井に唸る昭和の扇風機
炎昼に訳の判らぬ人の列
峰雲に伍する雄姿よ電波塔

蛍狩

島津初花

人声の遠くにありし蛍狩
吾子の手をすり抜けたるや糠蛍
古代から光を繋ぐ源氏ぼたるかな
墳丘へ浮きつ沈みつ蛍の夜
乱舞して蛍は闇の中へ落つ
残業の父は蛍と戻りけり
二階から蛍呼ぶ声下りて来し

或るテレビ番組で虫博士と言われる位、虫を愛する人の話から、蛍の生態について面白い発見があった。関東地方の蛍は五秒に一回光り、関西地方の蛍は二秒に一回光る。正確な学識に基づいたものかは定かでないが、気象の違いか、気温の差なのか謎は解けない。蛍にとつて大切なことは、清らかな水。私の集落には年中切れることのない山清水が流れている。毎年地域の子供達が、親子で蛍の観察会にやってくる。町内には、熊川宿周辺、瓜割の滝公園下など、蛍の生息を妨げない環境整備が行われている。入梅の後後わずから二十日程の生命の光りは子供の頃から季節を感じさせてくれる妙薬のようなものである。

銀座点描

境

延昭

紫陽花や一号館の赤煉瓦
南風奉行所跡が駅の
片蔭を縫うて銀座のオムライス
地下で観る巨匠の名画梅雨の晴
寄り道のトラヤで選ぶ夏帽子
西日中銀座の路地の活版所
手みやげは物産館の芋焼酎

コロナで蟄居の二年半、街が恋しい。とは言え、渋谷や新宿には居場所が無い。特別の馴染みがある訳では無いが銀座は不思議に落ち着く。「銀座で句会、銀座で飲む」の甘言に乗せられて二十年近い。元は三丁目だった会場が今は新橋、往きは東京で下車し二駅ほどの距離を歩く。昼を挟んで二時間ほど、丸の内から日比谷の道や銀座通りなどコースを変えて気促に過ごす。全く縁がないのは近年増えたブランド店のビル、骨休めは専ら画廊である。

風琴

●季音雪欄作家近詠鑑賞

町野 広子

◇近景（五月号）

保護犬のまどろみ深し浅き春
春灯や鶴を折りゐる手暗がり
何擱む 赤子の拳松の花

茂木和子

無類の犬好きの作者。訳あって保護される動物が後を絶たない。掲句の犬は、心から信頼出来る人に貰われたのであろう「まどろみ深し」に胸がいっぱいになる。紙の鶴をこれ迄幾匹折った事か。ひよっとすれば、目を閉じていても折れるかも知れない。手暗がりを気にしない作者なのである。拳の中は幸がいっぱい。長寿を象徴する松の花が、赤子の未来と生命力を約束してくれる。希望に満ちた一句である。

電線に膝繰る鳥の長閑なり
一斉に放つ風船門出の日

のびのび春らしい風景がここにある。電線にまったりしている鳥。敵もない昼の一コマで、見ている作者もホッと平和な気分に入る。長閑の対象が鳥であるのが面白い。多くの風船を放つ門出。色々と想像を巡らせてみる。進水式、豪華客船出航、デパートの開店等々。何れにしても、未来に向かう高揚感と、人々の笑顔が見えて来る。生き物や植物を育てて愛する作者の、細やかな感性と、芯の通ったお人柄を、いつも好ましく思う。

◇半身（五月号）

電気工事の白き火花よ雪女郎
雖しまふ明るき憂ひありしかな

永野史代

一般に見覚えがあるのは、溶接等の赤や黄色の火花。しかし、電気の花火は白いらしい。金属や石等の物質で発する火と電気とは、大きな違いがあり、今や最も近代的な火花と雪女郎の取り合わせが面白い。華やかな雛人形も、しまう時に感じる一抹の寂しさ。丁寧に包み、元の箱に正しく優しく納めて行く。再会を約束し「明るき憂ひ」は言い得て妙。

せせらぎに触れる指先水温む
半身かなしび半身よろこび西行忌
春夕焼の裏に潜みし戦かな

「せせらぎに触れる」優しい言回しに、女性の細い指が浮かぶ。春の小川の辺を歩き、思わず触れてみた水の温み。多くの偉人の忌があるが、季語として詠むのは、仲々難しい。あの芭蕉さえも敬慕した西行法師の忌を、作者はえも言われぬ表現で修し、見事としか言えない。心豊かな作者ならではの一句である。空を染める夕焼に思わす立ち止り、明日も晴れと確信を持つ。しかし、空は一つ。この向う側では悲しい戦が続き、多くの人々の生活や命が奪われている。人一倍優しさや心配りの作者の悲しみが伝わる。

◇美術館（六月号）

大村節代

仁清に見惚るる人よ春の展
立ちつくす紅白梅図うららけし
大和絵に似絵ありとや春惜しむ

熱海のMOA美術館を訪れた作者。江戸前期の陶工が（通称壺屋清右衛門）仁和寺門前に窯を築き「仁清」の名を印した作品に見入る人がいる。陶芸好きにはたまらない。又、此処には、三点の国宝が収集されて居り、その一つ、尾形光琳の「紅白梅図屏風」のあまりにも見事さと迫力に、言葉もなく立ち尽す。鎌倉時代までの、日本の事物を描いた絵は、大和絵と言われる。その内には、当時流行の肖像画で、対象に似せるを目的としたものは、似絵と言われ「平重盛像」「源頼朝像」「後鳥羽上皇像」などがある。

一樹から観音生まる涅槃西風
教祖とは時に狂人春日影

彫刻とは、とてつもない技能だとつくづく思う。どの領域も、凡人には真似る事は出来ないが、一本の木から生まれる仏像。丸太を削る事は、やり直しが利かない。仏師の手から柔和な面の観音様が生まれる。嘗て日本でも、教祖を名乗る男に、多くの高学歴の若者が洗脳され、人々を震撼させる大事件があった。若者達には柔軟な心で広く世を見て欲しいと願う。迫方の一句。水明の編集長として、日々多忙の作者。二十五年以上のお付き合になる大切な方である。

◇囀（六月号）

菊池ひろこ

囀の地を皇族のセダン這ふ
借景に葉桜と風官庁街

皇族の方々の乗られる車がゆっくり進む。「這ふ」と言える程の速度なのである。出迎える沿道の人々への配慮でもある。地方への訪問の折には尚更の事であろう「囀の地」は今緑に溢れている。日本中夢の世界だった花の季節も、今は葉桜の爽やかな景色になった。殺風景な硬質の官庁街は、風に揺れる葉桜が瑞瑞しく、人に街に新たな生命力が漲る。

芝陽炎書斎を置かば中二階
黒漆の箆筒に眠る春シヨール
野遊びや背で見分くる縁者たち

近年では、子供達に個室が与えられるも、父親の為の書斎を持つ家は多くないのでは？もしも書斎を持つならば、ちゃんまりした六畳が四畳半が落ち着ける。しかも中二階ならば最高。「芝陽炎」と「中二階」に心奮われた。母の物か祖母の物なのか、昔から見慣れた黒漆の箆筒。その中に、誰も使った形跡のない春シヨールが眠っている。昔の物は、品質が良いと思います。いつか作者の肩を飾る日が来ると良いですね。運動会や遠足等の多勢の子供達の中から、目敏く吾子を見つけられるように、親しければ親しい程、それは容易い。ましてや縁者ともなれば、見慣れた背中、仕草は一目で判る。あと一つは声である。これはズーッと変わらない。いつも優しい物言いで、多方面に秀でた作者である。

硯箱

◆季音六月

井口俊晴

タンカー三隻微動だにせぬ暮の春

大橋 勉代

晩春の和歌山の海。風もなく穏やかな海面は白い波が立つこともなく、丘の上から眺めていると、今まさに三隻のタンカーが、沖合に停泊しているように見える。ここ紀伊水道は海の銀座通り、日本のエネルギー供給を担うタンカーが、一刻たりと止まっているはずはないのだが、遠くからだと、三隻は微動だにしているように見える。なぜか春の終わりの物憂さが身に染みて感じられる。

朝寝する主に蹴きて犬も又

茂木 和子

春眠暁を覚えず、とか何とか言って朝寝を決め込む。すると、そばで寝ている愛犬まで軒をかいて起きる気配がない。以前はもっと寝ていたいと思っても、犬の方が起きだし、早く散歩に行こうと、鼻でツンツン催促したものだ。最近は犬も歳のせいか、いつまでも寝ている。こちらとしては

嬉しいような寂しいような、忠実な犬の健康と長寿を祈る気持ちでいっぱいである。

いつの間に更地に二軒春ともし

由良ゆら女

散歩をしていると、住み慣れた街のあちこちに更地が出来るのに気が付く。古い建物がなくなると、さて、以前はどんな家が建っていたのか、全く分からなくなってしまう。きょうは更地だった場所に、新築の家が二軒も並んでいた。最近はコンクリートの基礎工事が終わると、あつと言う間に家が完成する。それぞれの家にはもう明かりが灯り、新しい住人の気配がする。

母が好き風も大好き仔馬跳ね

石井 喜恵

幼稚園で習った「おうまのおやこは なかよしこよし」という童謡を思い出した。戦前の音楽の教科書「ウタノホン」に載っていた歌だ。お馬の親子は仲良しこよし、いつでも一

緒にぼつくりぼつくり歩く……。幼い頃、声を張り上げて歌っていたのを覚えている。春の牧場で仔馬が元気に跳ね、大好きなお母さん馬に甘えている。そよそよ吹いてくる風のなんと気持ちよいことか。作者の優しい眼差しを感じる。

街 薄 暑 盲 導 犬 の 眼 に 力 鳥羽和風

ちよつと汗ばむほどのお天気誘われ街に出てみた。歩く人の服装はと言うと、さすがに半袖やブラウスが目立つ。と人波の中に白い杖を突いた中年の紳士と、その左横にピツタリ寄り添って歩く盲導犬の姿を見つけた。車や人の喧騒に動じることなく盲導犬の眼差しには、心なしか力が籠もっている。そう、彼はいまお仕事なのだ。日本盲導犬協会によると、全国の盲導犬は九百頭ほどで、まだまだ少ない。これに對して盲導犬を希望する人は三千人もいるそうだ。

春 深 し 須 磨 に 平 家 の 鼓 動 聞 く 上戸千津子

晩春の神戸は、青い海に緑の山が迫り、青春時代の十年を過ぎた私は、これほど美しい土地はないと思っている。山陽電鉄の須磨浦公園駅で下車すると、すぐそこは一の谷町。NHKの大河ドラマ「鎌倉殿の13人」ですっかり有名になった源平合戦の舞台だ。すぐ近くの鴨越を駆け下った源義経の

ことは誰もが知っている。しかし、その陰で戦いに敗れ、短い生涯を終えた平家の公達や女房の哀しみ、息遣いも忘れてはなるまいと思う。

下 宿 屋 の 四 年 の 埃 雁 帰 る 青木鶴城

東京の大学を無事卒業して故郷に帰る。四年間住み慣れた下宿屋だが、これでもう戻って来ることはない。若者が暮らした部屋だから殺風景そのもの。机や椅子、ステレオ、布団など、高張るものを運び出してしまおうと、あとは埃しか残っていない。雁が翼を広げ、北の大地に帰って行くように、これからは故郷で家業を継ぎ、父母を助け、頑張って生きていく覚悟だ。

御 食 ひ 初 め 小 さ き 器 の 桜 鯛 野田静香

赤ちゃんが生まれて百日、無我夢中でお乳を飲ませた毎日だったが、ようやく落ち着いてきた。御食ひ初めは、そんな赤ちゃんの両親が「この子が一生食べ物に困らないように」と願いを込めて行う儀式。小さなお膳に、赤飯と一汁三菜の器。なんと、小さな桜鯛まで付いてオメデタイ。赤ちゃんみたいに、何もかもが小さくて愛らしい。我が家も五十年前に使った御食ひ初めセットを大事に残してある。

季
音
雪



君影草 小倉倭子

母の日の胎内仏の中に入る
遙か来て想ひもはるか桜桃忌
鈴蘭の風に虚飾の微音生す
スケッチする野原に座して君影草
かたつむり右利きで喰むエスカルゴ

孤独な木 栢尾 さく子

テーブルに映る空あり夏料理
往生の身近で遠し豆まはし
尺八で流す追分リラの坂
帰省子がゐる嬌声の湧く茶の間
梅雨寒を云ひて峠の孤独な木

百合 菊池ひろこ

喧嘩結び 境 延昭

小座敷のバランス崩す百合開花
山百合の土へ膝つく被写体よ
庭木より高くは翔ばず梅雨の蝶
南部鉄瓶あれば鈴蘭仮挿しに
鈴蘭の白となりたる森の陽よ

江戸前の喧嘩結びや三社祭
あぶな絵の隠し処を火取虫
梅雨茸一客だけの京の宿
鄙里の外湯の小径恋螢
格子戸を南部風鈴くぐり抜く

丁子引 五明 昇

ステッキ 椎野 美代子

軍艦島に昭和の余韻卯波立つ
アカシアの落花を纏ふ絵画売り
夜更しの古書肆に集る火取虫
徹の書の表紙を化粧ふ丁子引
美人画の団扇が起こす江戸の風

忌の近し此の道も又濃紫陽花
忌の近し紫陽花ロードの浮遊感
紫陽花に消ゆるステッキ深追ひす
濃紫陽花その一色を眼の化粧
紫陽花の波打つ裾は汀かな

薄 暑 島津初花

梅雨入りや厚き雲間に砲の音
夕薄暑見返りて笑む女客
仮り傘を持って余したる梅の雨
新ジャガのまづ一株を煮上げたり
夏蝶の行く手を追へば八方に

思ひ出の花 鈴木康世

浮き雲の流れは西へ沙羅の花
わが胸の思ひ眠らせ沙羅の花
露座仏の音なく濡るる合歓の花
浜木綿の咲く通ひ路は孤悲の路
浜木綿や鳴き声侘し浜鴉

青 時 雨 田寺玲子

万緑の翳あをあと須磨の浦
泊船のきらめく燈火青時雨
風そよと歌碑の続ける瀧の道
青嵐ドームに響くカンツォーネ
青嵐日時計ときを刻みゆく

河 鹿 十倉和子

山の子はいつも早足遠河鹿
行くほどに瀬音高まり夕河鹿
累々の岩をとよもし河鹿笛
玉川の石みなほとけ鈴河鹿
かの夜より耳に棲みつく鈴河鹿

一人 永野史代

咲くも一人散るも一人の白椿

夏服を着て母小さくなりたるよ

蔵に入れらる少女期ふつと梅雨寒し

緑陰にハイネ詩集を開きをり

風分かち合ふ緑陰の二人かな

梅雨の芝 西山貴美子

疾くに失せし地球鉛筆梅雨の芝

麦秋の風入れてやる混ぜ御飯

小童の声の散らばる梅雨晴間

半眼のこけし一対麦の秋

胴上げの腕全開に梅雨晴間

月見草 波多野寿子

人恋うる夜目にましろき月見草

琴を拭く絹の手ざはり梅雨晴間

外に佇てばさわさわと青葉風

白薔薇や夢をいざなふ音弾む

遠き日の戦火さびしむ大夕焼

富士見坂 星野和葉

校庭は四角まあるく夏燕

酒蔵の軒に四つ子の夏燕

立葵富士見えなくも富士見坂

正一位幟色褪せ立葵

鬼子母神すくすく天へ立葵

寄り道 茂木和子

遠目にもしかと花桐旅半ば
鈴鳴らし昼顔踏みて山羊の来る
麦秋や常に寝不足がちの山羊
梅雨茸や草間弥生がふと過る
一杯の黄の花ゴッホ紛るるか

落 矢作水尾

ふるさとの蒼天の香や夏蒲団
緑陰を出づれば岬晶子の碑
沖雲に湧きゆく力明易し
植ゑて三年落の茂りや庭の色
落の葉の終の住処に輝けり

梅雨寒 山中みどり

梅雨寒や百鬼夜行の妖怪図
梅雨寒の夜の紅茶にブランデー
梅雨の川舫ひ結びの屋形船
花浮かす手水鉢すみかに白目高
大甕の青空をゆく緋の目高

白き仮面 柚木治子

きりきりと痛む心や文字摺草
梅雨茸靈気を肩に鞍馬越
幹に生く白き仮面の梅雨茸
嘴太鴉に頭を襲はるる青葉闇
白孔雀みさうな気配青葉騒

北山にて

由良 ゆら女

波の音

石井喜恵

万緑のしめり芳はし丹の宮居
白鷺や加茂の河原に舞ふ阿国
水占はたちまち失せて夕かじか
まぐなぎに待たれてゐたる逢瀬かな
明日登る山黒ぐろと河鹿宿

朝焼や天地を分かつ乗鞍岳
近道といへど險阻や日の盛り
卯波立つ夕日の洗ふ人魚像
卯波寄す罅をこまかに岩畳
鮑桶沖に崩るる波の音

梅雨の生れ

網野月を

格

付

石山かつ子

青梅の青さに惚れることのあり
遠縁の男児預り梅雨の晴
梅雨寒や宅急便の不在票
無愛想な守宮の奴と暮らしをり
むら雲やたしか此方に梅雨の星

ふるさとをいきいき語り半夏雨
魂を抜かれしごとく火蛾の舞ふ
風薫る犬に格付されてをり
火取虫救急隊の担送車
かたつむり乳鋸の錆し大手門

和歌祭 大橋 廼代

花棟いま二の丸の天蓋に
城垣に脚を垂らして渡御を待つ
地を搔きて嘶く白馬和歌祭
赤銅の顔・顔・顔や御輿振り
御輿振り声囀るるまで「てふさあ」と

ところてん 大村 節代

遠近を描かぬ浮世絵花菖蒲
外海の遠近かすむ虎が雨
遠州縞の女と逢瀬鵜舟かな
麦秋や雄鶏不意に時告ぐる
女子会の終りはいつも心天

毎月25日発売 定価1000円(税込) 月刊 **俳句界** 2022年9月号

特集 生誕160年、没後100年 **森鷗外と俳句**

○論考く鷗外と俳句 岸本尚毅
○鷗外俳句セレクション 柳元佑太
○鷗外一句鑑賞 筑紫磐井 加藤かな文
高柳克弘 飯田晴 黒川悦子 相子智恵

特別作品21句 **森野 稔**

カラーズ 俳句界NOW 二ノ宮一雄

特集 色彩を詠む

○論考く色が入ることの効果 津川絵理子
○色が入った名句セレクション
「赤」篠崎央子 「青」田島健一
「黄」浅川芳直 「緑」川越歌澄
「紫」望月周 「白」藤田直子
「黒」中岡毅雄

○私がはっとした色の句 大野鶴士
中川雅雪 江見悦子 宮元佳世乃

※セレクション結社「朴の花」長島衣伊子

私の一冊 **古賀しづれ**「未央」
佐高信の甘口でコンニチハ!
中島京子 (作意)

対談 **「俳句界」投稿欄** 一流選者14名!
日本一充実の投稿欄

※一部変更の可能性があります。
お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

株式会社 **文學の森**

季音月

日盛り 井上燈女

日盛やバス待つ人のけだるげに
 翡翠を待つ目印の杭一つ
 梅雨晴間森を遠見に地蔵尊
 日盛や窓なき納屋に人の声
 夕焼を乗せ空つぼのロープウェー

翠 巒 丸山 マスミ

翠巒を仰ぐ外洋つばめ魚
 入梅や捌く袱紗のうす湿り
 リモートの遠忌法要燕子花
 花アカシア黙礼美しき修道女
 南風吹く大クレインの仁王立

見せ場 鳥羽和風

ドーランの女形に見せ場白牡丹
 青梅の産毛も愛しき稚の尻
 蜜狩シャボンの匂ふ子を連れて
 梅雨寒やまだ温かき火消壺
 冷し酒陛下自愛の吟醸酒

螢合戦 森本早苗

螢合戦一期一会の千種川
 活断層曝せしままを恋螢
 無住寺の闇の明滅螢飛ぶ
 河鹿鳴く仏母の御座す天上寺
 七変化生き生き沈む花手水

真珠光り 梅澤佐江

百花の競ふ格天井に風薫る
 本心を殻に秘めたるかたつむり
 紫蘭群生遠流の囲み屋敷裏
 蜘蛛の巣の真珠光りや雨上り
 夕風に白のさ揺らぎ葎の花

六月に 松井 由紀子

外も内も生温くなる梅雨入かな
梅雨湿り詮なきことを言ふ演歌
父の日や老杉すくと屋敷林
夕立風足踏みミシン音たてて
形代の頬に紅刷き流しけり

南風 高島 寛治

南風吹く郷土玩具が首を振る
鰻焼く見沼田の景煙らせて
退院の妻と見上ぐる夏の雲
雷鳴に露座仏そそと腰浮かす
臯月雨音無く進む和船かな

遠雷 大場 順子

外つ国へ発つ子に淹るる新茶かな
青春の交換ノート黴匂ふ
たまさかの光を受けて梅雨茸
遠雷や浄瑠璃芝居佳境へと
舞ひ込みし火蛾と一駅同席す

著莪の花 宇田 白鷺

父の日の何事もなく過ぎにけり
病葉や小石にしばし止りたり
梅干をまだ漬ける氣の母を持って
山開き両手で握る背のリユック
暮れなづむ杉の林や著莪の花

卯月波 内田 恵子

急坂は海に落ち込み卯月波
灯台はひとりぼちよ卯波たつ
船乗りになるぞと波止場大南風
アマリリス日常を突如出奔
屯する若者静か灯蛾の舞ふ

日向爛 町野 広子

昼酒は日向爛佳し初鰹
道迷ひひなげしの野に行きあたる
卯浪さ浪丘に小さき祠あり
卯波寄す百畳敷の岩場まで
木の根引く長男次男卯浪立つ

風立つ朝 森川義子

夏蒲団父を越えたる子の背丈
一木の緑蔭に寄る部活の子
葉ざぐらに風立つ朝の通学路
濁り鮒遡る一級河川かな
暮れてなほ明るき水路蝸牛

祭の子 井口俊晴

夏祭手足の長き少女たち
祭の子狐みたいな化粧して
数学の難問を解き心太
惜別の揺るる心やところてん
露座佛の視線遙かに卯波立つ

一人芝居 池田雅夫

頂の祠を清め山開
炎天を来て暗転の地下通路
間をおかず大いかづちの爆裂す
徒骨の一人芝居や暑氣中り
同郷のよしみを結び甘藷焼酎

著莪の花 霜中冬至

よそゆきの貌して喋る著莪の花
夏布団軽いが好しとせぬ男
唱へつつ般若心経ほたるとり
皺くちや顔して称ふる青田あり
著莪咲いて帰つて来るよ野良の猫

鈴蘭燈 山田美佐尾

酒蔵に蝙蝠酔ふて逆さ吊り
青嵐石の舞台のオペラ歌手
耳につく猫の鳴き声夏の月
南風空いつばいにシーツ干す
火蛾の舞ふ鈴蘭燈の並ぶ街

螢火 松宮保人

入れ替り子雀来たる昼の四阿
晚鐘を聞きて散りゆく深見草
シャツターを揚ぐるや否や夏燕
子に移す手に螢火の透き通る
大幣の大きく振られ山開き

餓鬼大将

荒井 俱子

荒神輿をとこ地を蹴り宙を蹴り
黒とかげ美輪明宏の怪しき眼
ジュラ紀より生きし形して蜥蜴這ふ
実梅もぐ彼奴は昔の餓鬼大将
髪洗ふ心遣ひの一番湯

てるひくもるひ

藤澤 喜久

てるひくもるひ「ハマ」のメリーさんは白い服
花ユツカ遙か海向く異人墓地
梅雨前線日輪涙脆きかな
大年増ケサランパサラン壁の黴
冷奴令和四年も半ば過ぐ

梅 雨

松山 清子

郵便受けの封書の湿り梅雨の入り
釣舟のあまた繋がれ梅雨の川
こはごはと仔山羊に触れて園薄暑
茶室へは飛石伝ひ苔の花
つくづくと一人に慣れて柿の花

花しやうぶ

渡辺 舍人

なんとなく寸幾天之多と空書梅雨曇り
折りたゝみ傘持ち来つる菖蒲園
水に発ち水尾に睡り花菖蒲
初花摘まれ苔の二番花菖蒲
はばたける風の吹き込む菖蒲園

雹の玉

野口 和子

ままごとの赤い茶碗に棕櫚の花
梅雨冷えや小さき諍ひ悔ゆる夜
緑陰へラツパの音と豆腐売り
穴あまた園芸ハウス雹の玉
父の日の定番柿の葉寿司の夜

時の日

川崎 道子

時の日や間歇泉の噴くを待つ
大南風ガイドに托す御朱印帳
梅雨じめり笊の釣銭生ぐさし
河鹿鳴くテント張る場所ここに決め
清流に洗ふ飯盒夕河鹿

螢

井関 礼子

螢舞ふ峽に住みしも半生を
東西の溪流に舞ふ夕螢
夕螢板橋よりのひとときを
木の間よりふはりふはりと螢の夜
梅雨入りの兆しの見えて風そよぐ

梅

酒

西浦 千枝子

去年の梅酒誉めつつ今年の梅届く
鮎解禁 古里の川竿の列
夏草伸び下校の子等の見えかくれ
薔薇咲いて今日も忙しくなる予感
新緑の森真ふたつに高速路

安曇野

井上 玲子

青梅雨や青石に浮く流水紋
梅雨空の月あはあはしラベル聴く
短夜や安曇野におく旅心
信玄の愛でし隠れ湯谷青葉
山葵田の水は清冽明早し

嘘二つ

正木 萬蝶

手折らるる為のくれなる虞美人草
鈴蘭やアイヌ口伝の悲話情話
母の嘘その母の嘘黴けむり
握る掌の湿める夜道や君影草
合宿所の青黴黒黴黴煙

鈴蘭

福田 千春

緑蔭に集ふ太極拳の黙
鈴蘭の香とすれ違ふ礼拝堂
緑蔭の木漏れ日ドットの影をどる
すずらんや清楚な妻は毒を秘め
胸ポケット寂し鈴蘭さしてみる

陽口

上戸 千津子

でで虫の方位指針か角忙し
陽口ひよこ聞くも楽しや夏夕べ
故里の山景共に枇杷届く
サイダーの暖も久し有馬道
涼風に六甲夜景瞬きす

季音花

みどりなる

河野 はるみ

薫り来る沼からの風句碑の丘
水底に朝日差し込み目高の緋
雄鳥の声に連なる雨蛙
初鰹遠州灘の器量よし
細き蕊残しすずらん去りしかな

妖怪

野田 静香

夏掛の魚と泳ぐ子の手足
渡良瀬の鶴今巢立かな
吹替への声優誰ぞ夏の宵
通り風縫りつくごと糸とんぼ
黒南風や妖怪の棲む美術館

安 寧

青木 鶴城

納骨の読経の乾き梅雨に入る
黒南風や骸の島の八十年
警策の動く気配や仏法僧
打水や九尺二間の抛り所
ぼつねんと暮るる川縁河鹿鳴く

梅雨空

日高 道を

君逝きて君を知らずや白牡丹
嫁入りの舟に卯の花腐しかな
黒南風や帰港を急ぐいさり舟
梅雨の午後時の止まりし過疎の村
我が腹で寝返りを打つ梅雨の猫

呼鈴

近藤 徹平

呼鈴や門前にゐるひきがへる
故郷を遠見の麒麟南風
新茶汲む離れ座敷や利久下駄
雷響や一坪半の鉄格子
妻払ふ紙魚や「源氏」の口語訳

万 緑 大塚 茂子

父の日や父を語れば母御座す
新じやがの小粒カラツと弁当に
万緑や餃子の璧の美しく
湧き水を守る万緑富士裾野
翡翠の風に色あり急降下

ロードバイク 石田 慶子

鈴蘭挿すグラスに透くる猫の顔
タキシードの胸に鈴蘭伊達男
青嵐に負けぬ二人の立ち話
緑陰やロードバイクの二人連れ
緑陰や母の弱さを垣間見る

あぢさゐ 石川 理恵

幸運の兆しか白き雨蛙
祖父の忌や読経とともに雨蛙
はきはきと告ぐ夏服の運転士
夏服で大胆なこと言はれけり
白あぢさゐの角を曲がれば濃紫陽花

青葉しぐれ 熊倉 千重子

ホテルのロビー向きそちこちに百合匂ふ
青葉しぐれ歌碑のかな文字なぞるかに
伸びやかに唄ひ出す鳥梅雨晴間
カサブランカの香る花束抱く女優
金魚鉢見詰めて居れば見つめられ

夏 祭 田中 章嘉

江戸つ子の血潮がたぎる夏祭
神田祭祭佐七も居るやうな
異邦人衣服姿や業平忌
薔薇園に妹背の姿前後して
早乙女に変はる田植機一仕事

六 月 下川 光子

山里に爺と山羊をり柿若葉
麦秋や後ろ髪ひく柵の山羊
火蛾とんで民宿の闇ざわめきぬ
生徒みな体育座り夏つばめ
町筋に江戸の名残を夏鶯

あぢさゐ 中野 彊

万緑よ八十の壁越えし日々
万緑よ砂庭ならす板の音
あぢさゐの雨待つ色に開きけり
梅もぎに来し植木師の声若き
庭園はつつじの名残り富士遠し

五月富士 野平 美紗子

五月富士望む母校の北の窓
五月富士画布に収めて旅立つ子
幾年や亡き友思ふ蛍狩
父の日や花束添へて宅配便
十葉や臭に負けて抜ききれず

青梅雨 宮崎 チアキ

水無月や千百号の「水明誌」
式典をカサブランカが盛り上ぐる
侵略戦の終はり見えぬや梅雨湿り
青梅雨の窓辺すがすがしき机上
仮住ひの白階段や蔦青し

著莪の花 飛永 鼓

過疎と云ふ響き悲しや著莪の花
人声の絶えて久しき著莪の花
杜若話の尽きぬ友と居て
父の日やたつた一度のびんた食ふ
田草取る今もどこかで争ひが

朝の虹 宮崎 紫水

夏霧の晴れて故郷の山ありき
電降りて野菜無言の悲鳴上げ
雷鳴やプラグ即抜く母の癖
外遊び止めし子供ら遠き雷
黄傘持つ児童の列や朝の虹

向日葵の花 後藤 綾子

向日葵の太陽に向き翳りなし
向日葵のすつくと立ちて凜々しかりけり
万緑を抜け来る風の芳しく
万緑を流るるミサ曲婚の鐘
女子校のカラフルな傘梅雨に入る

青田風 葛城 千世子

松葉杖の黄のランリック青田風
代田水小鳥の遊ぶグラウンド
絵日傘や大きバッグを肩に掛け
風薫る支部長を終へ花束を
河鹿鳴くただ歩きゆく二人連れ

強力 松島 寛久

強力 の 沢 に 駒 草 山 開 き
枕 辺 に 夕 べ の 秘 密 ほ た る 籠
青 梅 の 路 に 湖 風 君 恋 し
父 の 日 や 戦 士 と な り し キ エ フ の 夜
山 男 ケ ル ン に 祈 り 山 開 き

ウクライナ戦争 瀬戸 雄二郎

戦ふな向日葵畑へ逃げ込めよ
向日葵を踏倒しつつ行く戦車
向日葵の盛りが悲し瓦礫の中
向日葵や戦あらうが終らうが
紫陽花が好きだった日嫌ひになつた日

父の日 原田 秀子

父の日や粹な都々逸遠くあり
父の日や早世惜しみ白き薔薇
眼裏に父の笑顔や釣忍
万緑を揺らすアルペンホルンかな
万緑やフィトンチッドが満ち溢れ

神 鳴 曲淵 徹雄

拍手の響き虚ろに卵の花腐し
遠雷や実験台にひかるメス
胸中に醸す禁じ手はたた神
梅雨めくや山羊が餌を食む駅舎前
流木の白く寝そべる夏河原

歓 声 保坂 翔太

沈黙ののちの歓声野火走る
愛鳥日森を育つる受光伐
山藤の垂るる切り岸舟下り
椰子の実を岸へ岸へと青葉潮
気魄満つ白禪の滝の僧

蝻 笹本啓子

鎌倉は坂道多し濃紫陽花
蝻舞ふ一夜泊りの山の宿
蝻見や看取りを終へし者同士
彼の手が背中にまはる蝻の夜
商談を決めて仰ぐや五月富士

旅 靴 檜鼻 ことは

無防備な路地の平和や西瓜割り
麦の秋さて老いらくの旅靴
茶屋町を抜けて寺町著莪の花
浜木綿や海のとりの乳児院
ランニングシャツの少年麦の笛

☆ ☆

座談会

最近の名句集を探る

増成栗人『草蜉蝣』 司会 筑紫磐井

松野苑子『遠き船』 大西朋

津高里永子『寸法直し』 四ッ谷龍

不巻頭三句

安西 篤

奥坂まや

井上康明

水田むつみ

小河洋二

樽谷青濤

不今月の華

大木孝子

松尾清隆

不俳句と短歌の10作競詠

豊里友行

屋良健一郎

特別企画

ホノルル美術館

を楽しむ

不好評連載

南伸坊

筑紫磐井

俳壇観測

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手触り、俳人の響き

大西朋

神作研一

てのひらの江戸

—— 古典籍を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

酒井佐忠

本の窓辺

二ノ宮一雄

一望百里



Haiku Shiki

2022年9月号

8月20日発売
定価1000円(税込)

<http://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

『水明誌』を繙く（水明六月号）

高岡 修（「形象」主幹、現代俳句協会理事）
協会賞選考委員

芝陽炎書齋を置かば中二階 菊池ひろこ

陽炎の椅子に忘れし父の杖 石井喜恵

前号で私は言葉に対する誤読の効用を書いた。今回、私は言葉の記憶による意味の増殖作用について書いてみたい。というのも、掲出の作品を読むと同時に私は次の作品を想起したからである。

父を嗅ぐ書齋に扉を幻想し 寺山修司

ことほど私にとって〈書齋〉の一語は寺山作品と結びついてしまう。そうして私は〈二階〉の一語から次の作品を想起する。

二階より地のひるがおを吹く友や 安井浩司
かげろふを二階にはこび女とす 加藤郁乎

私がここで言及したいのは、〈書齋〉と〈二階〉という語の使用によって、先人の三作品のイメージが菊池の作品世界を広げているということだ。わけでも菊池作品に絶対固有の意味世界を与えているのが〈中二階〉という場所の設定である。一階でも二階でもない中二階。その何ともあやふやな位置が芝陽炎と科学反応を起こし、摩訶不思議な俳句の時空を現出しているのだ。

さて、また陽炎の作品である。陽炎といえは私はすぐに次の作品を想起する。

原爆地子がかげろふに消えゆけり 石原八東

そうして父の一字で想起するのが、前出の寺山作品と次の一句なのである。

ひばり野に父なる額うち割られ 佐藤鬼房

これら引用の作品によって私の嗜好の傾向もまた歴然とするだろうが、とにかく〈陽炎の椅子〉という詩句が秀逸である。同じような意味ではあろうが〈幻の椅子〉という表記でこれほどのイメージは立ち上がってこない。つまり、在るようでも無く、無いようでも在る椅子が、陽炎化した形態をともなつて、ゆらゆらと揺れている。その椅子に父の杖を忘れたのだというのである。おそらくは、父の死とともに忘れたままで、次の杖は必要なかったのだろうと思われる。となると、この〈陽炎の椅子〉は此岸と彼岸の中間に位置していることとなる。菊池作品につづく〈中〉の現前である。そんなあやふやな場所で杖についた父の指紋もまた陽炎うている。

現代俳句鑑賞

網野月を

ほうたるにはじめて逢つた疎開の子
大谷石蔵錠前にもほたる火
すこやかに七人家族ほたるの夜
書き継いで朝日ほうたる光らずに
ほたる死す徹宵のペン置きたれば

〔俳句〕6月号・ほたる火の記憶より

黒田杏子

第一句第二句は、作者が小学一年生の疎開先での印象から着想を得ている。頗る素直な着想である。第三句は戦後数年を経ての作者中学一年生の頃を詠んでいる。そして、第四句、第五句は寂庵の事々を投影しているであろう。連作の最後の四句には「寂聴さんの」と前書きがある。生命感の充溢する「ほたる火」の特別作品五十句である。圧倒される質感と、ノーガードの作風が恐ろしいくらいの切迫感を以って読者を襲ってくる。

朧月読経のごとく出刃を研ぐ

三品史紀

〔俳句〕6月号・出刃を研ぐから

中七の「読経のごとく」の直喩表現は、どう解釈したらよいのであろうか。「淡々と」「淡泊に」ということなのか、そ

れとも「祈りを込めながら」ということなのであろうか。または「習慣として」ということも考えられないわけではない。直喩表現を使用しながら、その直喩の表現にこそ奥行きを持たせることができている。そして座五の「出刃を研」いでいる主体は誰かを考えるとき、筆者は作者自身の行動と解釈したのであるが、上五の季語と中七の直喩から作者が見ている景であるとも考えられる。

手袋の右手は右のポケットに

津高里永子

〔俳句界〕6月号・自選30句より

手袋を失くさないようにと考えるならば左右一緒にしまうようにも思うのだが、むしろ便利の為であろうか。それとも単に作者のルーティンなのか。他に「愛欲や手折りて氷柱手を滑る」がある。

火の山へ黙禱長き登山隊

五明昇

〔俳句界〕6月号・みすゞ刈るより

この「黙禱」は誰のためのものなのであろうか。山で遭難した山友かもしくは身内のためのものなのであろうか。具体的な人ではなくても遭難碑などがあれば、山を志す方々は祈

りを捧げるものである。そして山の神へ安寧の登山ができるように祈願するのである。筆者は上五の「火の山」を読むとき御嶽山を思い浮かべた。山という巨大なものへの畏怖が横溢している。他に「ケルン積む男に傾く稚児車」がある。

てのひらにのせて仔猫のお尻かな 高柳克弘

〔俳句四季〕 6月号・よろこぶはずのより

仔猫の可愛さをそのお尻に発見したということなのであるが、「てのひらにのせて」新たに気付くことがある、ということなのである。小生物への慈しみの心がそこには在る。図らずも他者の良所を見出したことへの感謝というか、見出すことの出来た作者自身の自己肯定感があるようにも読める。他に「蜥蜴出づよろこぶはずの吾子居らず」がある。

小枝にも春夕焼の行き渡る 植田いく子

〔俳句四季〕 6月号・水を足すより

上五の「……にも」から、幹は無論のこと夕焼色に染まっていることが自明である。座五の「行き渡る」がその景を二重に担保していて、景を固定している。普通ならばこの重複した確定には、ある種のくどさを感じるもののだが、本句にはくどさを感じられない。むしろ丁寧に言い尽くしたところに句の完成度を高めた効果を読み取ることが出来る。中七の季語「春夕焼」だからなのであろう。他に「水はけのよい土水を足す五月」がある。

千年の秘仏は厨子に春の闇 成木幸彦

〔俳句四季〕 6月号・春の闇から

座五の季語「春の闇」の幹旋が絶妙である。「秘仏」であるだけに「厨子」の中は永年闇の中であるのだが、「厨子」そのものもまた「春の闇」の中に置かれているのだ。「千年」という間誰も直に押んだことが無いのである。本当に「厨子」の中に「秘仏」は坐すのであろうか。その真実こそが「春の闇」の中なのである。

汗の馬手綱束ねて曳きゆける 長嶺千晶

〔俳壇〕 6月号・涙せぬより

左右の手綱を纏めて、という意味に解釈した。そもそも手綱は、乗馬の轡の左右の側面から繫留されて、元は一本の綱になっている形状が多いと思われるが、それぞれが別の綱になっている物もある。どちらにしろ、手綱を束ねて曳いたのである。これより「冷し馬」「馬洗ふ」ということになるのかも知れない。軽妙な叙景の中に情感を込めている。他に「涙せぬ別れもありぬ単帯」がある。

昼の月弥生の富士とおなじ色 原 浩一

〔俳壇〕 6月号・夢見月より

上五の「昼の月」と「弥生の富士」とは同じ色合だということである。いつ頃の時間帯の「昼の月」であり、「富士」なのであろうか。筆者は、朝の景かと想像した。同じ時間帯に同時に見比べて、「おなじ色」と言ったのではないだろうか。

自選二十句

森美枝子

銀盃の寿浮かせ屠蘇の酔
立春や老棟梁の祝唄
恋猫の地凶なき路を走りけり
木の芽風肩でかぢ切る一輪車
ソプラノの胸ふくよかよ山笑ふ
雲雀野のぽこんと落つる牛の糞
一族に紺屋の屋号藤の花
草餅や古びし吾の母子手帳
雲梯に花影散らす花水木

カンナ燃ゆ熱戦続く草野球
秋灯や切粉の跳ぬる町工場
容赦なき一陣の風かいつぶり
覚えなきノートの付箋神の留守
小春日や臀の丸みの紙パンツ
凧が回転ドアを攻めあぐむ
山茶花の垣根の奥に嬰の声
うどん屋のおまけのあられ秋うら
そうろりと免許返納冬の蠅
暮早し惣菜店は量り売
冬木立映して湖の鎮まれり

花開くとき

境 延昭

水明の登竜門「新珠賞」受賞、おめでとうございます。迂闊にも美枝子さんが新珠賞に挑戦したことを知らなかった。受賞が決まった後に句友に教えられて知った。星野光二前主宰よりコクーンカルチャーセンター俳句教室の講師を引き継いだ後の受講者、講師としてこの上ない喜びである。

教室への入会は令和元年の九月、俳句との出会いである。カルチャーセンターの開講日は月に二回、月を単位に受講料が定められており受講希望者は月後半の教室を見学して翌月から入会が普通である。美枝子さんは友人と二人、九月の最初の教室を見学して即次回からの入会を決めた。友人の方が積極的に美枝子さんはお付き合ひ、背中を押されての入会であった。先導役のその友人、年を越す頃に病氣入院で退会。俳句に対し心が揺れた入会から三か月、その間の句を引く。

秋雨や濡らして届く新刊書
富士の嶺や光の海となる芒
歳時記の春夏秋冬冬用意

山茶花の垣根の奥に嬰の声

表現の確かさは初心のものとは思えない。特に第二句、叙景のスケールと句の深みに将来の可能性を感じる。

令和二年、越年の頃からコロナの災禍に見舞われた。三月から六月にかけて教室は閉鎖、その間幹事の努力で通信句会の形で乗り切った。美枝子さんもよくぞ一人で頑張った。

木の芽風とぎれとぎれのハーモニカ
雲梯に花影散らす花水木

そして教室再開。その初日の句に俳句への決心を確信した。
張り替へて浅間の風の網戸越

ここで聞き書きながら、美枝子さんの略歴に触れておく。実家の家業は父親創業の産業用省力化機械の製造会社。幼時に兄を亡くし早くから家業を継ぐ心で居た様である。高校を卒業後他に就職することなく家業の一員として働く。中学の同級生を見染めて結婚、一男三女の母となる。しかし平成十一年に父、十五年には夫の死去によりその後二十六年に長男に譲るまでの十一年間を社長として会社の運営を担う。趣味は山野草盆栽、落語そして読書。ご主人の趣味が落語と野鳥観察、野鳥の会の会員であった。二人での寄席通いは勿論山野草の自生地探索や野鳥観察いずれも夫婦同伴だったようである。今は社長である長男はじめ三人のお嬢さんも夫々に結婚独立、五人の孫が居る。百歳のご母堂は今も健在である。

以上の略歴を念頭に美枝子俳句の心髓に迫っていききたい。

〈家業〉

家業継ぐ心に決めし葱坊主
秋灯や切粉の跳ぬる町工場

季語「葱坊主」の斡旋するものは何だろう。当初、決意の固さと酌んだ。経歴を知るとその時の自身の幼さの様に思える。夜業に至る町工場の現実を客観視して詠む。

〈夫恋ひ〉

かたくりの花君を見染めし十五の春
生粋の笑ひ上戸やはじき豆
コスモス野リフト静かにすれちがふ
秋ともし長押の夫へ090
夫あらばけふ金婚の初しぐれ
喧嘩してとがりし妻に玉子酒
マフラーに吸はない筈の煙草の香

生前の夫を回顧、夫と表記せずとも句に夫が居る。死別からやがて二十年、スマホの携帯番号は今もそのまま残る。愛煙の煙草は両切りのピースだったに違いない。

〈親として〉

花曇目を見て嘘を聞いてをり
二寸五分肩上げ抓み七五三
嫁がせて目深にかぶる冬帽子

目を見て嘘を聞くの措辞に子を信じる母親の真摯な子育てぶりが読み取れる。

〈社長の名残り〉

恋猫の地図なき路を走りけり
木の芽風肩でかぢ切る一輪車

予期せぬ社長職、正に地図なき路であったに違いない。末尾の強い断定に納得する。よろよると走る一輪車の様な舵取りの思いだったに違いない。

〈母を詠む〉

小指反る母似のしぐさ更衣
蛸や白寿の母は鶴を折る

愛おしく、白寿を寿ぐ気持ちが表示される。

初心から足掛け三年、経験が詩心を育み開花の時を迎えた。その美枝子句の特長を考えるに、①過去の経験、回顧にも拘らず季語を過去に埋没させない技量②措辞の具象性③季語と表現する措辞との距離感の良さの三点である。趣味の野草の会は盆栽仕立てが目的、それが句作りに似ると言う。

春愁ふマトリョーシカの同じ顔

最後に直近の句を掲げる。ロシアの突然のウクライナ侵攻が今年二月、独裁者プーチンの顔が浮かぶ。社会性と現実を捉える視野の広さと眼識に更なる飛躍を予感する。

自選二十句

元田亮一

思ひ出は淡雪にじむ水彩画
春分の雨やはらかき夕べかな
薄明の一隅照らす黄水仙
泡のごと遮断機の鳴る春の暮
葉桜やミント浮かべるギムレット
新樹光十六歳の日はありし
ひらがなの風のこゑきく薄暑かな
金管のかすかな調べ風薫る
近よれば近よつてくる金魚かな

梅 雨 茸 憂 鬱 色 の 雨 が 降 る
虎 が 雨 打 ち 棄 て ら れ し 古 人 形
夏 山 の 峠 に 父 と す れ 違 ふ
炎 天 や ゴ ッ ホ の 画 集 片 づ け る
ウ ル マ ン の 詩 読 み な ほ す 青 野 か な
塵 拾 ふ 魂 拾 ふ 大 夕 焼
後 の 月 酒 杯 に 満 つ る 夜 の 気 配
秋 桜 じ つ と 見 た ら ば 穢 れ だ す
凧 や 真 白 き 紙 垂 の 千 切 れ を り
中 ほ どの 熊 手 求 め て 帰 り け り
薄 色 の ニ ン フ の 棲 ま ふ 冬 木 立

たぶん、嘗ては文学青年か

網野月を

文学を志す者もしくは愛好する者は、永遠の青年であり、人としての完成を自ら懷疑している者であろう。懷疑しているからこそ、文学において自己を映し出そうと試みていることに他ならないのである。文学とりわけ詩の世界において、詩を鑑として自己の不完全性を補正して映し出そうとするのである。氏の自選二十句には、そのような口吻が芬芳と感ぜられるのである。むしろ芳気であるのだが、この境遇は自らを律し続ける矜持を生涯持ち続けなければならぬという極枯が待っていることは言うを待たない。

春分の雨やはらかき夕べかな
ひらがなの風のこゑきく薄暑かな
近よれば近よつてくる金魚かな
ウルマンの詩読みなほす青野かな
中ほどの熊手求めて帰りけり

文字通り程の良い句柄である。二十句中に籀のように組み込まれて全体を調整している。自選二十句には新珠賞受賞作の十五句の底抜けの明るさを控えて、淡い陰翳が投影されて

いる。その中で以上五句を挿入したことは、平衡感覚の優れた調整を作り出すことに成功している。なかでも第四句目の座五の「青野かな」は優れた季語の斡旋である。

泡のごと遮断機の鳴る春の暮
梅雨茸憂鬱色の雨が降る
薄色のニンフの棲まふ冬木立

以上の三句からは譬喩の妙を感じる事が出来る。前句「泡のごと」は九十九パーセント座五の「春の暮」への修飾であるろうが、「……ごとき」でもないし、語順的に近い中七に「……鳴る」の動詞があるので「泡のごと……鳴る」の解釈の余地が残る。次句の中七の修飾語「憂鬱色」は、これは直截的に「雨」に掛かっている。その分読み手には一読後、腑に落ちるものがある。第三句目の中七の「ニンフの棲まふ」が座五の「冬木立」を修飾している。この「ニンフ」は決して良性の妖精ではなく、時として約変する魔性を有する「ニンフ」であろう。舞踏劇『積恋雪関扉』の桜の精となり果てた元傾城墨染を想像してしまうのである。

夏山の峠に父とすれ違ふ
塵拾ふ魂拾ふ大夕焼

この二句には一種の宗教性というか、氏の敬虔な側面を感じる。斯く在りたいというよりも斯く在るべきだという心性 *ethos* を強く感じるのである。霊的なものへの関係性を詩に描き出そうという事は、並大抵なことではないのである。剩え俳句というよりも具象化を求められる世界では尚更であ

る。果敢にチャレンジしていると思うのだが、氏のこれからの課題の一つであり、生涯かけて取り組んでほしいと願っている。次句については、「一緒する句会で初見した。句座の方々からの様々なご意見が多出した句であった。」

後の月酒杯に満つる夜の気配
秋桜じつと見たらば穢れだす

虚を創り出すことの面白さを感じさせられる句であろうか。氏においては虚を創り出す楽しさを味わっているということでもあろう。もしくは「夜の気配」「穢れだす」は心象と言っても良いかも知れない。前句の「杯」は洋酒を想起させる。上五の季語が「名月」ならば「盃」ということになるのであるが、「後の月」なので洋酒なのである。言葉に対する生来の感性が横溢している。

思ひ出は淡雪にじむ水彩画
葉桜やミント浮かべるギムレット
炎天やゴツホの画集片づける

前句の「淡雪」、次句の「葉桜」、第三句目の「炎天」の季語が、句意の中で一種の存在感を有している。何れもが句意と照らして、従来の季語の本意・本情を拡大することに成功している。この「淡雪」は融けないし、この「葉桜」は桜花以上の存在感を発揮しているし、この「炎天」はゴツホの絵画以上に焼け付いていない。「思ひ出」を想起させている「水彩画」「ミント浮かべるギムレット」、そして「ゴツホの画集」を「片付ける」ことの方が余程、季語よりも強い表現の意志

を持つているように句の中に巨立している。一種の存在感とは、句全体を包含するような大きな力を発揮する季語ということではなく、その反対に句意の中で相対化された季語の在り様という意味である。強いて矛盾する言い方を許していただければ、句意と季語が相対化するための仮の基準となっている季語、くらしいの意味合いである。

新樹光十六歳の日はありし
金管のかすかな調べ風薫る

少々ノスタルジーを感じる句である。「過去の事柄を詠む云々ではなくて、過去を表現することでの今この時を生きている意味を問うている句であろうか。」

薄明の一隅照らす黄水仙
虎が雨打ち棄てられし古人形
凧や真白き紙垂の千切れをり

景の良く見えている句になっている。「黄水仙」「古人形」「紙垂」という具象が句意の中で機能しているからである。正確な叙景句になっていて、最前句の五句と並んで、もう片方の籠になっているようだ。

以上自選二十句からは、新珠賞受賞作品の十五句とは異なるコンセプトを読み取ることが出来る。勿論、同一の作者であって、この二連作は、平行線ではない。そこには氏の句いや色合いが漂っている。ただ自選二十句は、各々が一句として成立している作品であって、句毎を対照して読むものではないだろう。

自選二十句

後記朝香

安達太良の稜線ゆるむ雨水かな
せせらぎを聞きてふくらむ猫柳
梅東風や白きシユーズを新調す
ランドセル跳ねてゆくなり桜道
鳥々の起こす波紋や朝桜
白木蓮妖しきまでに闇に浮く
青嵐大仏様の端然と
藤浪やむらさきの香に包まれて
鳩時計眠たげに鳴き春深し

夏めくや洗濯物に陽の匂ひ
甘やかな薔薇の香りに目覚めけり
麦秋や九九唱へつつ下校の子
ボサノバのボリユーム上ぐる町の梅雨
夜のしじま火蛾の乱舞の音はげし
晩夏光トップの選手去り行きぬ
秋めきて友への便箋選びをり
実紫小雨に濡れて色深し
残照の海静かなり枇杷の花
ダム底に沈みし村や初氷
父と子の厨に立つや女正月

更なる精進を

青木鶴城

新珠賞の受賞おめでとうございます。

蝌蚪の会へ所属されてはいても、高齢者住宅施設にお住まいの後記朝香さんは、コロナ禍にあつてなかなか施設長の外出の許可が得られず、入会から一年半を経過する現在に至っても誰ひとり面識がない。

従つて、句会へは欠席投句での参加となるのだが、沢山の選を集める句は、いつも決まつて代理者である筆者が名乗る「朝香」なのである。

水明ホームページの「お問い合わせ」を通じて、入会希望の意思を受けて以来、メールによる私との交信以外は何方とも交流がないので、句会のメンバーは興味深々。一体どんな人なのか、兎に角謎めく存在である。

ご本人は、これまでではあまり俳句に興味が無かつたとの話だが、ご両親共に俳句に親しまれ、お二人の合同句集を上梓される程の俳人だったとの事であり、姉君も他の結社で長年俳句に親しまれている、所謂俳句一家の環境であつた様である。それだけに俳句の上達も目を見張るものがあり、初応募

での受賞は快挙である。

北国や柳葉魚干されて空茜

入会されて最初の句。柳葉魚が干されたまま夕刻となり、空が茜色に変わつていく様を詠んだものだが、「北国や」と上五に置いたことで、冷たい空気感まで伝わってくる。とても初心者とは思えない句である。

厨仕事せきたてられし冬至かな
父と子の厨に立つや女正月

台所を預かる身に、否応なしに急ぎたてる年の瀬の何か「厨仕事」に込められている。二句目の父と厨に立っているのは男の子なのだろう。台所に立つ父と子を不安げに微笑ましく見守っている景が忠実に表現されている。厨を題材とした冬至と女正月の句だが、やや季語の説明感が残る部分は入会直後の句なれば、か。

待春や辻の地蔵の赤帽子

辻のお地藏さんの赤帽子にもうすぐ来る春を感じている作者の目線がかわいい。赤帽子のお地藏さんの優しい顔が浮かび、温かみを感じさせる句である。

安達太良の稜線うるむ雨水かな
せせらぎを聞きてふくらむ猫柳

作者は、二歳から小学校六年生まで福島県の元宮町に疎開

をされていたそうで、阿武隈川や安達太良山、田んぼ等々の自然豊かな環境で育たれたとの事。掲句二句共にそんな自然の記憶が呼び起された句であろうか。立春を過ぎて芽生えを迎える頃に、冬の乾燥した空気が潤み出す状況を「安達太良の稜線うるむ」と詠んだ。猫柳がふくらむせせらぎもきつとご本人が第二の故郷とおっしゃる阿武隈川なのであろう。実景が生み出す言葉の力みみたいなものを感じさせる。

つくつくし母の遺愛の詩集かな

母君は俳句を嗜まれていて、父君と合同句集を出された事は前にも紹介したが、詩をもこよなく愛されていた事が伝わる句。もしかすると、好きな作家の詩を口ずさみながら土筆を摘んだ日の事を思い出した句であろうか。つくつくしと詩集の取り合わせが秀逸である。

ランドセル跳ねてゆくなり桜道 麦秋や九九唱へつつ下校の子

小学生を詠んだ句。黄色い帽子の子のランドセルは体を隠すほど大きい。まるでランドセルが跳ねている様に思えてしまふ。まして桜が咲いている頃は、紛れもなく跳ねているのはランドセルなのである。そんな子たちも二年生になると九九の授業が始まり、皆が半袖になる頃の通学路は、九九を覚える自習塾となるのである。施設の窓越しの景であろうか。「麦秋」の季語が努力の実りを暗示する。季語の斡旋が素晴らしい。

ソナチネの繰り返さるる冬ぬくし ボサノバのポリユーム上ぐる梅雨の午後

新珠賞の選評にも書いた通り、作者には色や音を詠んだ句が多く見受けられる。掲句の二句は正に音を詠んだ句である。繰り返されるソナチネに冬の寒さを忘れ、鬱陶しい梅雨の雨音にはポリユームを上げてジャズに聴き入る。音楽を、否、音を愛する作者の個性を感じる。「ソナチネ」が作者の個性をさらに豊かにしている様だ。

残照の海静かなり枇杷の花

どつしり据わった句で作者の成長を感じる句である。大きな景と枇杷の花へのフォーカスが、残照という時間と共にしつかりとした絵をなしている。絵手紙や巻絵やヒエログリフを習熟された作者ならではの絵心なのであろう。季語の「枇杷の花」を際立たせた句である。

コロナ禍で、外出が許可されない状況にあつてはなかなか吟行の機会もないであろうし、句会の仲間との合評の中で自分を高めていくことも難しいとは思いますが。そんな環境においても確実に実力を蓄えておられる後記朝香さんの日頃の努力をととても頼もしく思います。

コロナが終息し、句会でご一緒できる日が来るのを楽しみにしています。益々の精進の元、更なる力を発揮され、今後も佳作に邁進して下さい。

山本鬼之介 選

水明集

翡翠の姿一瞬向かう岸

泰山木の花咲く庭に瞑想す

難題に額寄せ合ふ夏の宵

草木の初夏の華やぎ大広野

初夏や起動の力増しにけり

禁教を逃れし鳥や走り梅雨

禁漁の立札濡らす夏の雨

卯の花腐し屋敷稲荷の油揚

卯の花腐し音楽堂へ続く傘

実生より育てし大葉夏初め

さいたま 山岸久美子

村杉清吉

さいたま 反町 修

いにしへを偲び真夏の紫禁城
内蔵助偲ぶ花街や卯の花腐し
黒潮の匂ほのかに初鯉
フォルティッシモ磯笛を吹く鮑海女
隠し芸踊る鮑は網の上

上尾 横山君夫

笛を快音一打掘り上ぐる
地中には地中の温み筍掘る
同じ子のまだ居る夜店ひよこ売る
空五月太き棟木を揚げんとす
ロープウェイ新樹の海を滑りゆく

さいたま 渋谷さいち

染谷正信

通過貨車待つ踏切や夕薄暑
五月雨の滲む印字はキリル文字
麻服や写真の父に憧れて
印半纏片肌ぬいで祭筍
夏の夜や然したる事の無き我家
卯の花腐し借りる細身の女傘
是よりは女人禁制木下閣
実演の女剣劇夏夕べ
柏餅成績表に五が一つ
烏賊を焼く女のうなじ夜店の灯

遙かなる稜線光り夏浅し

さいたま 元田亮一

通学路まだ定まらぬ若葉風

着地せり忍びて百歩雲雀の巢
和菓子には八十八夜の深蒸茶

さいたま 新井孝磨

葉桜やミント浮かべるギムレット

春昼に新品学生燥ぐ道

モヒートの香り深まる夕薄暑

一重なるレンタル着物薄暑なる
網棚に箱根ラスクの薄暑かな

虎が雨打ち棄てられし古人形

新聞の兜むづかる初節句

熊谷 越田栄子

草野球ボール転転たんぼぼ野

ときめかぬ物みんな捨てまひよ更衣
更衣園児の手足によきによきと

梅澤輝翠

出来ないは出来るへの道かたつむり

指先に這はせて楽し天道虫

生きものに命吹きこむ若葉風
夏めくや襟の黒子と夜会巻

見所は曲とのコラボ噴水ショー

千草色男まさりの単帯

葉柳を眺めゆるりと潮来舟

さいたま 新 曆文

印象は新茶の如きうぶな人

眼閉づれば体の中を若葉風
笹剥けば白き粽の踊り出る

菅原真理

葉柳や外湯を巡る下駄の音

薄暑光トランペットの音はづれ

大鍋で粽しゆんしゆん朝の風
更衣肩まで軽きバスの旅

夏服や足湯にゆるる脛白し

夏めきて友よりメール「旅してます」

実家の牡丹高齢なれど数多し

平塚 丸屋詠子

人知れず倒木に咲く苔の花

麗しき少年の透く青簾
日和なり人の手集め袋掛

小林京子

厳めしき修験の山ぞ岩清水

厳かに銀座を渡御の神輿かな

初夏の空エッフェル塔に灯の点る
初夏や小品集の楽譜選る
洗ひ髪のままジンを飲む薄暑かな

歌舞伎座に至る薄暑の遊行かな

引越しの荷を解くひと日花の冷え

自惚れの桜傾ぐや水鏡

夜上がりの動物園の花の屑

燈消えて夜桜黒き点描に

満開の桜を散らし電車過ぐ

さいたま 本橋稀香

ユーカラを語る媪や夏ゆふべ

京豆腐青磁にもられ夕薄暮

遅き日や露店に並ぶバラライカ

墨すれば奈良の香や夏柳

海黙す神に預けし夏椿

さいたま 池田珪子

ビルの谷間に卯の花腐し降りつづく

コロナ禍の個人商店卯の花腐し

巢立鳥小雨の中を親離れ

ポスターの薬物禁止夏休み

禁断の果実手に入る夏の夢

千坂平通

ビジネスマン上着片手に薄暑かな

水やりの如雨露重たき薄暑かな

葉柳や銀座のをんな歩の軽し

雲ひとつなき日のマラソンや夏柳

古本の印字のうすれ夏暖簾

篠崎紀子

競ふかに気品の極み薔薇咲けり

紅き薔薇華やぎもどる西洋館

夏さざす車夫の走りの清々し

露剥くや徐々に黒ずむ指の先

嬉々として一途に母は路を摘む

岡田宣子

あとがきを先に読む癖走り梅雨

梅雨寒や師よりの墨書力なく

温暖化じわじわ進み走り梅雨

朝まだき魚河岸かに活気や夏に入る

夏旅の海岸通り朝散歩

清水桂子

亡き女将自慢の粽山の宿

さ緑の風の流るる更衣

吸ひ込まれゆくリフト若葉の深き谷

海岸を離る汽笛や初夏の風

若葉の中の地蔵の帽子まつさら

西幅公子

若葉風日課となりし捜し物

橋桁をひらりとかはす川燕

亡夫とのセピアの写真若葉風

花人や他人行儀に行き交へり

露地いちご収穫してはジャム作り

杉戸 佐々木史女

のびのびと泳ぎ切れるか鯉のぼり
卯の花や豆腐屋のラッパ遠くなり
行く春や野望すさまじ外つ国は
藤棚に手を伸ばしたる園児達
律儀な庭師刈り上げたるや躑躅垣

東京 畑宮栄子

寄席帰りひたる余韻のサングラス
風を切り車夫駆け抜くる街薄暑
河岸替へて本音飛び出す菖蒲酒
悪童の降澄みたる夜店かな
躊躇ひの刃入り筥もらひけり

伊奈 菅原卓郎

魁夷の絵「道」を掲げて更衣

さいたま 竹澤和子

元気良き早乙女の声風に乗
夜店の灯射的の前の人集り

春日部 仲田利子

夏めきて米研ぐ音の軽やかに
夏めきて古利根川の照り返し
対岸へ向かふ渡船や夏帽子

大釜を庭に設へ筥掘
信濃路のこけし訪ぬる余花の道
夏燕飛び交ふ街や空青し

八重桜惜しまれて逝く人なれや

若狭 山崎郁子

楠若葉古墳の丘の傘となり

伊予 向井章子

種蒔くや夫の小言を聞き流す
種蒔きて今年限りと思ふなり
複写機のインク乏しく日永かな
夏燕この家に嫁して五十年

老鶯や石棺三つ並ぶ陵
夏兆す波に揺蕩ふ白帆船
散り急ぐ木香薔薇や庭は黄に
紅薔薇の我物顔よ我が狭庭

バードデー翻訳したき鳥の声

越谷 阿部幸代

ピクルスをポリッと噛めば今朝の夏
ボンネット焼けたる匂ひ夏来る

さいたま 加藤でん治

あの日のやうに岸辺の桑の実の赤き
野性味に惹かるるままに苺摘み
甘酸つばきは初夏の味なりジャム作り
竹の子の振り向きしかな一斉に

陽に光る洗車のしぶき立夏かな
庖丁研ぐひととき無心滲む汗
水打つてのれん掛けたる立夏かな

旅誘ふ駅のポスター夏きざす
母の日に届く派手目の運動着
友来る手に挽ぎ立ての莢豌豆
輕輕と越ゆる鉄柵薔薇香る
緞帳背に深き一札紅き薔薇

さいたま 斎藤みよ

錦鯉餌に群がれば色弾け
薫る風手ぐしで髪の中へ入れ
人影に緋鯉寄り来る神の池
夏の星野外ホールの楽に酔ふ
沿線眩し梨はさかに袋掛

吉川 杉浦理恵

初夏の雲わかれの言葉まだ言へず
風死すや今一色の夜の海
夏はじめ留守電の母若やいで
白牡丹我見る空を見てをりぬ
ぼうたんや待ち顔のまま日が暮るる

川口 新井のり子

糸底の指の擦れや花の冷え
春愁ふマトリヨーシカの暝き顔
虹色を放ち鱚の春深む
草餅や古びし吾の母子手帳
草笛や眠りを覚ますワイン蔵

さいたま 森美枝子

咲き満ちて重さに耐ゆる白牡丹
富貴草至高の雅幸を呼ぶ
ブラウスの白き輝き夏初め
色ごとに咲く日違へし牡丹園
牡丹園綺麗綺麗とはしやぐ友

さいたま 遠西勢津子

若葉萌え鳥居を隠すトンネルに
夏めくや歯抜けの葦簀修繕す
貫ひし挿木その一本に若葉かな
夕焼や笹舟の発つこの岸辺
更衣湿布貼りしを忘れをり

小川 洋子

客の声真似る鸚鵡や愛鳥日
里山の岸根蛙や鳴き交す
山原のグスタに立てば若葉雨
雨に濡れ庭明るうす花南天
初夏の朝寄せ来る波と戯るる

野村 美子

夏めくや山の道標立てかはる
山小屋の夏布団干す這松に
町おこしトレイルランの薄暑かな
農家カフェ主の趣味の赤き薔薇
花びらを摘みて入れたるローズテイー

木村 るみ子

薔薇園や色と香りのシンフォニー
薔薇咲くやアマチュア無線発信す
英女王へ贈られし薔薇凜として
夏めくや水辺の子らの声高し
夏めくや花粉情報どこへやら

さいたま 小駒さち子

あをあをと泉湧きたる山は雨
蓮の花暮れては黄泉の匂ひして
雪溪や光りて星と交信す
嘘泣きを素知らぬふりで梅雨の明く
桧杣角に口づけ冷し酒

小山敦子

すれちがふ若さのかをり夏の朝
補助輪がママに寄せきて雲の峰
川岸に髭浮き沈み大鯨
青嵐鳩の大軍いれかはり
小さき蜘蛛の行つておいでと戸を開く

飯田忠男

夏草や早瀬を跳ぬる銀の鱗
囀や上野の森の音楽堂
四重奏の余韻に浸る夕薄暑
島の春渡る人なき信号機
陸奥の風を包みて袋掛

草加 外村紀子

教室は白に若さの更衣
昨日今日齡変へたき更衣
電波の日千々に星座を廻らせて
甘味処のれんゆらして薄暑かな
豆三つ豆五つでも蜜豆

さいたま 川田政代

柿若葉覗き見したき蔵の窓
雨上がり虹に気付かぬ妻を呼ぶ
老いたれば取り替へつこの更衣
ペビーカー親子合作鯉のぼり
気負はずに百歳体操風薫る

和田仁八郎

美しき人の名探す薔薇の園
薔薇の名も上方訛り中之島
薔薇の家主は車椅子の人
沖繩の五十年とは黄薔薇剪る
夏めくや離宮の垣の青深む

横山礼子

大柄の父いとほしむ金魚草
新緑やロープウェイはてつぺんへ
散歩後はビヤガーデンの大ジヨッキ
新緑や拍子抜けする声一羽
新緑や日程表も無駄となり

山戸美子

花筏浮き来て鯉の鱗背かな
亀鳴くや想ふは遙かミシシッピ
香の円き味噌も手作り柏餅
柏餅兜飾るに男の兎欲し
花葎や語り合ひしは星の下

東京 水落守伊

麦の秋天に聳ゆる重機かな
青嵐世相の安泰いつの日か
橋に立ち祈りかかさず青葉風
麦秋や用語辞典に首つたけ
母の日や娘から届くカルビ焼

和歌山 南條さわゑ

オレンジの薔薇五十本届きし日
歩の留まる蔓薔薇白き煉瓦塀
三角の透き通る棘赤き薔薇
夕照の地藏菩薩や夏椿
歌舞伎観て柿の葉鮓はまた今日も

さいたま 綿貫ひさの

初夏のマスクを通す紫外線
園庭の手作り幟パタパタと
教室で習ふ男の夏料理
出窓よりレッズの旗と鯉幟
花菖蒲ゆつくり進む傘の列

さいたま 田中泰子

噴水の陰に白杖友を待つ
噴水の前がゴールや走りきる
ままごとのパバの手大きてんとむし
玄関が裏鬼門らし天道虫
訓練の防災頭巾に天道虫

東京 飯室夏江

蒼き空地蔵尊に天道虫
動き出す始発電車や夏はじめ
天道虫机上に本の開かれて
改札の前に人待つ夏の朝
天道虫動きを止めし棋士の指

山下ユリ子

美女歩むかにしなやかな糸柳
楊柳の秘めごとひとつふたつみつ
葉柳を気まぐれ風のゆうらゆら
青空に白ブラウスの溶けこみぬ
薔薇の香に包まれしばし瞑想す

さいたま 霜多光代

夏めきて風さざ波に乗りにけり
野を渡るドラムの音や夏さざす
行列の木霊比べやこどもの日
旧道のでつべん余花の隠れをり
胸に抱くモナコ王妃の薔薇の鉢

秋谷風舎

薔薇一枝部屋を和める力あり
夏めきぬ百歳超ゆる元氣でる

さいたま 川村 治

深呼吸夏めく風に味のあり
施設庭バラ一輪が光りけり

入居者のやつと植ゑたるバラ咲けり

槍烏賊の釣果称へし夕餉かな
家苞の筍担ぎ急ぎ足

春日部 諏訪サヨ子

綿菓子の子居跡とや草茂る
縄文の住居跡とや草茂る

万緑や清氣賜る空也仏

美味なるや婿の釣果の鱈さしみ

着岸の船は伊豆から初かつを

行列の中華粽や小体店

レシビ見て中華粽の蒸しあがる

ワイシャツの襟の眩しき若葉道

さいたま 森下美智枝

皆そろひただそれだけの子供の日

餅くへばあとはそれぞれ子供の日

人知れず早くちりたや余花一つ

名声は五才児のごと四十雀

五月雨や下手なピアノでひまつぶし

川島夕峰

頭たれ樺若葉に雨重し
柏餅味噌あん残し子供会

東京 柳父はる

水田の平らかなるや五月尽
わけもなく空見上げをる五月かな
道すがら葉となる桜蔭つくり

船頭のテナー高らか夏柳

さわさわと鳴る一幹や夏柳

信号の赤に苛つく夕薄暑

薄暑光天井高き駅ピアノ

展示会終へて一息つく薄暑

さいたま 鳴海順子

マイセンの皿の御出ましさくらんぼ

ロゼワインすぽんと抜けてさくらんぼ

さくらんぼグラスの縁に艶めきて

親も子も風追ひ回す夏野かな

夏野原夕日を喰らふ地平線

森 和子

ゴッホ展木下闇へ落つる券

しづかさや卯の花腐し漏る駅舎

主が来ると聞こゆ泰山木の花

迎へたる独逸の血筋夏館

籐椅子の窪む歴史に加はりて

吉川拓真

雨あがる庭木生き生き夏めきぬ
夏兆す女子スカーフの蝶結び
ばら園の紅一輪に君思ふ
活けし薔薇赤黄納まり自然流
残照に蔓ばらの白宙にあり

さいたま 染矢峯雄

行く春や空薫そつと運ぶ風
若草や急須に開く陽の香り
薫風や車椅子押す夫の黙
薫る風靴紐緩め握り飯
鳴かずるて明日は田植ぞ雨蛙

さいたま 村山八千代

風が追ふ風船と児のおにごっこ

武田重子

横浜 山岸弘子

葉桜の塩漬作り子に伝授
老木の尚遅しや花は葉に
青葉風十数台の單車音
バスを待つ新樹の中のロータリー

長生きの花束白き百合の数
母の日の謂れしらべて母は亡し
早苗田に一番バスの逆さ影
ただ悼む北海遭難春寒し
夕薄暑自主トレといふ杖歩き

夏めくや二階建てバス皇居前

樋口元美

東京 山中いちい

夏めくや頬を撫づるは朝戸風
夏めくや洗濯日和のハミング
浮き花に真紅の薔薇を浮べをり
薔薇の名のミチコマサコのプリンセス

戦火なほ赤きひなげし風に揺れ
ひなげしや群れも独りも風のまま
新曲のステップを踏む梅雨晴間
手放せば風吹き通る五月晴
旅立つはこんな日であれ五月晴

葉桜に修験の法螺や吉野山

岡田芳春

さいたま 湯浅 和

水紋の和菓子並びぬ夏浅し
葉桜の広場の園児遅しく
吹く風の高原に似て夏浅し
大輪の薔薇一輪の孤高かな

葉桜やパパの背中で動く足
新樹中大名寄進の石灯籠
少年のペダルの軽き新樹光
ぼんぼんぼん紙風船のひとり言
葉桜や城あと抜くる青き風

湯上りの赤子受くるや菖蒲の香

和歌山 嶋田洋子

五月の風何故か浮き浮きスニーカー

武甲山の桃色白粉風薫る
手をつなぎ帰るゆふがた風薫る

さいたま 河井育子

白牡丹独りの自由持て余す

欠伸して薫風を吸ふ土手の上

するすると話の糸口新茶汲む

本閉ぢて聴く青蛙池畔

鈴懸咲く即かず離れぬ影二つ

菖蒲活け皆の幸せ祈りたり

南風田圃ラグビー泥まみれ

熊谷 篠塚正行

トランペットを吹きたる苑に南風

魂の幾多眠りて向日葵畑
婿のつと捧ぐる一輪カーネーション

川崎 鈴木玲子

狭山より新茶が運ぶ友の便り

シエルターに空なし風船大空へ

野良仕事疲れし体新茶汲む

噛み合はぬ話延延菜種梅雨

母の日に息子装ふ作り声

母の日の湯気に眼鏡を曇らせて

急に指す師に冷や冷やと初夏の午後

さいたま 高原和子

腕を這ふ天道虫の羽ひらく

赤い芽のゆつくり開くアマリリス
今年竹歩道橋より高くのび

鬼石 加藤ナヲ子

両の手に守つてやりたき天道虫

アカシヤの花は小さき風にゆれ

初夏や動物園の明るさよ

葉桜や一本道の右左

夏蝶の微動だにせず眠りをり

母の日やワイン片手に息子くる

妹は時代小説桐の花

鬼石 榊原聰子

久々に子と孫集ひ五月かな

赤子笑み白き歯ふたつ夏浅し

さいたま 石浜悦子

母の日や自分のために日々草

葉桜や日に透ける葉の中に空

抱卵のつばめの尾羽はみだせり

五月晴何かよきことありさうな

落煮物相撲みながら夕餉くる

青空を見上ぐる小さき鯉のほり
しらす干でつかい夢もあつたるに

店頭の朝取りトマト道の駅
走り梅雨屋台店主のほやき声
雄猫の威を競ひ合ふ新樹閣
夏めくや主婦のお喋り長々と
短夜や旅寝の供の単行本

さいたま 鈴木藻好

惜春の止めを波に竿を投ぐ
大樹の根きらめき流るる犬ふぐり
黒猫の瞳に揺るる鯉のぼり
還暦や吾に降り注ぐ花吹雪
急流や子鴨連なる大冒険

大阪 飯塚智恵子

道端の野草いきいき彼岸かな
入彼岸墓誌をなぞりて父母想ふ
鳥々の起こす波紋や朝桜
ランドセル跳ねてゆくなり桜道
咲き満ちて桜のかすむ琵琶湖かな

さいたま 後記朝香

子育ての幸せな時期粽蒸す
太極拳大会初夏の公園に
心安き旧友天へ聖五月
新緑の窓一瞬は永遠と

宮代 関谷多美子

ペダル漕ぐリズムや薫る風揺るる
風薫る焼き玉ねぎの甘さかな
ハミングに弾む足音風薫る
薫風や古墳一周駆け競べ

さいたま 鈴木敦子

吉宗は白馬で参上和歌祭
赤ちゃんのハイハイリース若葉風
朝燕背なの軽さよランリック
麦秋やいよよ来たか反抗期

和歌山 高橋満耶子

幾年の淡き夢見し水中花
元彼に慌ててかけるサングラス
狭庭にも幸せ広がる青梅かな
心太酸いも甘いも流し込む

さいたま 福田育子

遍路道つづく杖の音高く低く
梵鐘の余韻嫋々春の山
観音の指にゆれぬる春の塵
田の水や鶉色となる春ゆふべ

奥山粉雪

卒寿なる母と頬張るさくらんぼ
さくらんぼ店頭飾る道の駅
夏野原一石申す道しるべ
さくらんぼ昔話に盛り上がる

落合和枝

草本を螺旋に進み天道虫
孫二人駅に着くまで天道虫
噴水の仕上げ高だか夕間暮れ
噴水の先に堂々門司港駅

さいたま 緒方みき子

薫風のいたづらかなシャツ膨れ
薫風よかをり漂ふ港町
雨蛙白く膨らみ恋の音
雨蛙ボルダリングはお手のもの

さいたま 小田美智

友を待つ茶室に一輪山法師
裏庭や露のしゅうとめ残りをり
ほろ苦き露の葉兒等は箸付けず
伽羅露を噛みしめ思ふ吾が人生

藤 沢 小島喜代子

古里へ続く単線浅き夏
夏浅し旅行ガイドに赤き丸
葉桜や歯がためを噛む子の無心
葉桜やお色直しの遊歩道

橋爪さなえ

夏浅し袖の長さの昨日今日
葉桜の頃に別れし君何処
葉桜や隠れんぼする鳥の声
朝まだき漫ろ歩きの浅き夏

さいたま 鈴木香音子

三伏の化粧のくづれ肝斑と皺
南吹く風のリボンの縹色
けふと言ふひとひが終はり汗拭ひ

所 沢 関根千恵

川明かり女兒の指差す鯉のぼり
鯉のぼり鱗に愛し児の手形
ひらがなのスコアボードやこどもの日
ララバイの絶えし曲輪や夏柳

大 阪 遠藤人美

夏めきて卒寿の姉とレストラン
大輪の真紅の薔薇や棘隠る
薬王寺円空開扉五月晴

さいたま 糸井しるく

夏浅し児は待ちきれず靴を脱ぎ
靴は手に裸足で帰る街薄暑
葉桜や老いて教はるつなぎ糸
無職なり手持ちぶさたのところてん

草 加 持永喜夫

天空へ湧きつ広がる雲の峰
柿若葉道筋沿ひの光なる
夏を呼ぶ岸辺の草よ手を翳し

古池恵里子

作品評

山本鬼之介

泰山木の花咲く庭に瞑想す

山岸久美子

北米東南部原産のモクレン科常緑喬木で、10〜20メートルにもなる高木である。和名は、樹の全体の様子を中国の泰山（中国山東省泰安市の北方にある名山で世界遺産になっている）になぞらえたとも言われている。初夏五・六月に直径15cmくらいの6〜12弁で大形の白い花を空に向けて咲かせ、強い芳香を放つと解説されている。

このような解説を踏まえて本句を鑑賞すると、この木がある庭の規模とそれに伴う邸宅の様子が浮かんでくる。作者の自宅であるかどうかに関係なく、このような木と特徴のある花のある場所に居ることによって、普段にない精神状態に置かれていると言えるのではないか。「瞑想」という言葉を辿ると、作曲家が曲を創作している姿と捉えるのが最も相応しいように思えるが、文芸の世界にも通じる言葉であるから、作者の身近な環境に即して、一句を創作している姿と解釈すれば、本句こそがその成果であると言えるだろう。

卯の花腐し音楽堂へ続く傘

村杉清吉

掲句の音楽堂が何処にある建物なのかは明らかでないが、筆者としては、前後の措辞から連想して、上野公園内に昭和62（一九八七）年に移築復元された旧・東京音楽学校奏楽堂であってほしいと思う。何故なら、筆者が小学五・六年の頃、東京芸大の奏楽堂で行われた長谷川かな女師の息子・博さんの卒業演奏会に父・嵯迷と一緒に赴いた思い出があるからである。その時は、かな女師と、終生に亘って水明の屋台骨を支えてくださった吉澤ひさ子さん（かな女賞の最初の受賞者）も一緒であった。

初夏の爽快感とは裏腹にやや陰鬱な五月の雨の中を行く傘の人々を思い描くと、その舞台は若葉に包まれた上野公園がぴったりである。季語が音楽堂と相俟って芸術的な雰囲気をつくり出している。因みに、博さんの専門はフルートで、その時の音色が今なお耳に遺っている。

フォルティッシモ磯笛を吹く鮑海女

反町 修

三重県志摩や能登半島の舳倉島など、鮑を獲る素潜り海女を詠んだ句である。磯笛とは、素潜りで鮑や栄螺などの高級魚介を獲る海女の呼吸法を表す言葉で、海面に浮上した海女が口笛を吹くように息を吐くことである。フォルティッシモ

は、音楽の強弱標語「フォルテ」よりも強くの意であるから、作者の耳に届いたその磯笛がより強いもので、自分に何かを訴えているように聞こえたのではなからうか。なかなか異色で魅力のある俳句である。

空五月太き棟木を揚げんとす

横山 君夫

新築住宅の建設現場である。クレーンを使って棟木を吊り上げてゆく。長く重量感のある棟木がゆっくりと五月の青空に向かって上がってゆく景は爽快である。散歩の途中でたまたま見掛けた情景かと思われるが、棟木が所定の場所に落ち着くまでついつい見続けてしまったのかも知れない。上五の「空五月」が、クレーンの牽引力そのものであるかのような躍動感に満ちた俳句である。

通過貨車待つ踏切や夕薄暑

渋谷きいち

旧・国鉄時代の15屯や17屯の有蓋車や無蓋車が、民営化によってJR貨物のコンテナに替わりかなりの年月が経った。鉞を担いだ金太郎を描いた高馬力の機関車が、コンテナや石油タンクなどを沢山牽引して踏切を通過して行く。客車と違って運転が乱暴で衝撃音が大きい。やっと全車両が通過して踏切の遮断機が上がってゆく。ある街の一日の一つのリズムをイメージする「夕薄暑」が秀逸である。

烏賊を焼く女のうなじ夜店の灯

染谷正信

解凍した丸ごとの烏賊を鉄板に載せて焼く烏賊の丸焼きである。食欲と呑助を誘い込む芳ばしい匂いが辺りに充滿している。夜店の定番であり花形である。首に掛けた手拭で時折汗を拭き、化粧も台無しであるが、どこか憂いのあるきりつとした顔つきがよい。嘗ての高倉健の任侠映画で観た訳ありの女を想い出す。男で苦労したのであろうか、髪をアップにした項に淋し気な色気が漂う。

虎が雨打ち棄てられし古人形

元田亮一

季語は旧暦五月二十八日の雨、即ち鎌倉時代の武士・曾我十郎祐成に因んだ雨で、なかなか扱いにくい季語の一つであると思うから、先ずこの季語を取り上げた作者の勇氣を買おう。そして、次に考えることは、この季語を用いたことが成功したかどうかであるが、筆者としては一応成功したと思う。資源ごみ集積場所に棄てられている古人形と曾我十郎に纏わる物語の哀れさとが、そば降る雨によって結ばれていると思えたからである。

見所は曲とのコラボ噴水シヨ

越田栄子

技術万能の現代に於いてはそれ程驚くことではないのかも知れないが、曲に連動して様々な動きをする音楽噴水には何

時も圧倒される。恰も噴水の装置の中に楽士が潜んでいるような気がしてくる。様々に変化する噴水と、その動きにぴったりの曲との演出が観客の心を奪うのである。

葉柳を眺めゆるりと潮来舟 新 曆文

「潮来笠」「潮来花嫁さん」「潮来夜船」など、潮来を題材にした演歌が昭和の佳き時代に生まれ、未だに懐メロとして歌われている。あやめが咲く頃の潮来の水郷巡りが素晴らしく、筆者もむかし二度体験した。

さて、掲出句では夏の風物の葉柳が主役となつて読者にその景観を想像させる。水辺にしなやかな枝を垂れ、水面に映つた影を揺らしている葉柳である。令和の演歌が生まれそうな景色である。

厳めしき修験の山ぞ石清水 丸屋詠子

日本三大修験道の山は、北から出羽三山（山形県）・大峰山（奈良県）・英彦山（福岡県と大分県）とされているが、修験者〃山伏の山中での修行や生活は一般人には想像できない厳しいものである。山自体からその厳しさが感じられ、山の湧き水を口にすれば身が引き締まるかも知れない。

着地せり忍びて百歩雲雀の巢 新井孝磨

雲雀は、人間や天敵に巢の在り処を知られないようにするために、巢から直接飛翔したり、また、直接巢へ降下しないよう用心している。この俳句の「忍びて百歩」は、雲雀の百歩であるのか、それとも、雲雀の巢を見つけようとしている人の百歩であろうか。雲雀が着地した場所を見定めて、抜き足差し足して其処へ近づいて行く人と思つた方が面白味が出てくる。

夏めくや襟の黒子と夜会巻 梅澤輝翠

夜会巻は夜会結びとも言い、明治・大正期に流行した女性の髪型と解説されている。図で見るとなかなか艶めかしくて男心を誘う。映画や舞台で用いる髪ではなく、地毛で結っているのだとすれば、素人の女性ではなく、会員制のバーとかクラブのマダムのような玄人女性だと思われる。何かの折にちらりと見える「襟の黒子」が決め手である。

眼閉づれば体の中を若葉風 菅原真理

初夏の或る日、遊歩道をゆっくり歩いて何時もとは違う別の公園へと足を伸ばす。公園中の樹々が若葉で装い、その中を渡ってくる風がまことに清々しい。携行してきた水を一口飲み、眼を閉じて深呼吸すると、頭の中がすーっと軽くなり蘇生したような気持になった。身体全体が若葉に染まった。

麗しき少年の透く青簾 小林京子

「麗しき少年」を筆者なりに解説することは可能であるが、敢えて放置しておく方がよいと思う。折角のヒーローが唯の少年に還ってしまうような気がするからである。

今夏取り替えたばかりの簾越しに見えている少年の姿である。青簾というフィルターを透して、作者の眼にはその少年がアニメ映画のヒーローのように映っているのである。さて、そのつづきを知りたいが、次の機会までお預けにしておこう。

満開の桜を散らし電車過ぐ 本橋稀香

掲句のような情景にびつたりの鉄道路線としていま筆者の頭に浮かぶのは、秩父鉄道・江ノ電・JR小浜線などであるが、何れにしろ沿線に桜の木が多く、線路と桜の木がかなり接近している場所である。桜もいよいよ最終期を迎えて絶えずはらはらと花弁をこぼし、少し強い風が吹けば花吹雪となる。電車が通る度にその風圧によって花吹雪の景色を披露して乗客を楽しませている。

ビルの谷間に卯の花腐し降りつつく 千坂平通

近年東京の大都心における耐震化をスローガンにした再開発が進められ、今なお各所でその動きがある。それ以前のビ

ル街の景観は、高いビルとビルの間がちっぽけな建物が挟まっていたりして、所謂「ビルの谷間」の言葉がそのまま通用した。「卯の花腐し」という陰鬱な雨が、「ビルの谷間」によってさらに冥さを増したように感じる俳句である。

紅き薔薇華やぎもどる西洋館 岡田宣子

子供の頃に愛読した江戸川乱歩の「怪人二十面相」の話の中によく西洋館が出てきたので、未だに西洋館の言葉の響きとその姿に憧れの念を抱いている。

さて、この西洋館はどのような状態におかれていたのだろうか。「華やぎもどる」で、空き家になっていた西洋館に人が入った、西洋館が薔薇の季節を迎えた、の二通りの解釈が成り立つかと思うが、どちらの解釈もそれなりに趣があると思う。紅薔薇が主人公であり、宝塚の舞台を観ているようなわくわく感がこみ上げてくる。

さ緑の風の流るる更衣 西幅公子

句意は、更衣したことによって緑風の生まれる感触を得たとか、さらには、更衣して身体の中から緑の風が流れ出してゆくような気持になったことだと思うが、これは美意識過剰な表現ではなく、作者の抱いた真情なのであろう。日々熱心に俳句に取り組んでいる作者ならではの作品である。

水琴窟

(水明集六月号鑑賞)

池田雅夫

国後の望郷の墓流水來

松島寛久

高安永柏は『抑留の父待つ子らに流水來』と詠んでいる。北海道のオホーツク海沿岸にはシベリアから流水がおし寄せ。北方領土の返還は全く進展していない。祖先の墓を残したまま国後島から立退かざるを得なかった無念を訴える。

八ツ橋の鯉が水先雛送り

飯田忠男

「八ツ橋」は池、小川などに、幅の狭い橋板を数枚継ぎ並べて架けた橋で、風情がある。「水先」は水先案内の略である。「雛流し」には、人々のけがれを形代として雛にうつして流すのである。厳かな行事に鯉も一役買っている。

思ひ出のひとつ加へて雛納め

綿貫ひさの

三月三日の雛祭は女の子のゆく末を寿ぎ祝うもので、地方によって行事の形態はさまざまである。子の成長とともに、その思い出が積み重なってゆく。「思い出のひとつ加へて」に、健やかに育つ子への深い愛情と優しさがあふれている。

オルゴールの陽気な音色春愁ひ

小林京子

「オルゴールの陽気な音色」にもかかわらず、気分がすぐれない。頭では理解していても物憂さが消えない。まさに、「春愁ひ」である。「陽気」と「愁ひ」の対比が効果的。

春の宵泣きたくなる時深呼吸

小山敦子

春は日が落ちてからもしばらく仄明るく、なまめかしい気がする。悲しいこと、辛いことに堪え、そんな時には「深呼吸」をして心を鎮めるのだ。暮れ残る町の情景に、希望を失なうことなく、光明を見出す心の強さが際立っている。

持ち寄りの漬物自慢や女正月

後記朝香

一月十五日を「小正月」といい、生活に密着した農民的な性格をおびる。京阪地方では「女正月」というようだ。自前の漬物を持ち寄り、年礼の初めとし、楽しいひと時を過ごす。その人ならではの塩加減、酸味。中七の「や」は不要である。

緋毛氈干して漸く雛納

北出久美子

雛祭がすむと、一年間しまい込まれる雛人形。男雛、女雛はもちろん、三人官女、五人雛子など一体一体をていねいに納める。天気の良い日を見計らって緋毛氈を干し終えたのだ。「漸く」に、お雛様への惜別の念をくみとることができる。

田向かうに桜色づく旧街道 山岸弘子

五街道ばかりでなく、鎌倉街道など、昔栄えた主要道路沿いに植えられた桜であろう。周りに広がる田んぼには水が張られ、やがて打ち返され苗代作りが始まることだろう。「色づく桜」は八重桜か。桜を写す春の水田が動き始める。

乳色の濃淡となり春の山 奥山粉雪

山の木々の芽吹きは種類によってさまざまな彩を帯びて、まるで紅葉しているかのように見える。「乳色の濃淡」と具体的に表現したことで、「春の山」が映像となって浮かぶ。芽吹きの初々しさと「乳色」が呼応して生氣に満ちている。

見沼田の桜回廊七曲り 樋口元美

見沼田んぼの東西を縁取る代用水に沿って桜が植えられている。遊歩道として花見の名所となっている。巨樹古木も多く、まるで「回廊」のようでもある。あえて「七曲り」としたことの議論はさておき、みごとな桜を注視したい。

九十年でふ光飛び二月明く 和田仁八郎

「光陰矢の如し」とも言われている。九十年という歳月を生きてきた人だからこそ、「光飛び」の形容ができるのである。「二月明く」に永年の万感が込められている。

春分の円き陽射しや老母の背 橋爪さなえ

昼の時間と夜の時間が等しい「春分の日」。冬の日に比べ、昼の時間が長くなったと実感できる。日射しも強くなり草木が芽を吹きはじめ。「円き陽射し」と捉えた感性を称えたい。それが老母の丸い背中を連想させる温かさがある。

神妙に小さき手合はすお中日 岡田芳春

「お彼岸の中日」は祝日で、学校、幼稚園は休みの日。家族そろってお墓参りに出かけたのであろう。親の仕草をまねて「神妙」に手を合わせている姿が浮かぶ。彼岸と言わず、「お中日」としたところにも可愛らしさが現われている。

水音のたゆまず聞こゆる露の臺 川田政代

「たゆむ」は、ゆだんする、心がゆるむ、の意味であり、それを打ち消しているから、水音がゆるまずに聞こえているのだろう。「聞こゆる」が終止形なので一旦切れ、取り合わせとして「露の臺」を強調している。早春の一こまがみえる。

白魚や腹の中まで泳ぎをり 福田育子

「白魚（しらうお）」は体長六十センチで、汽水湖に多く棲む。なお、おどろぐいにする素魚（しろうお）は別種。吉田静子の『白魚の水に放せば色もなし』の句を参考に。

網野月を選

山紫集

亀の子の渡る瓢箪池平ら

榊原聰子

亀の子やラグビー戦の合言葉

鈴木藻好

亀の子の異土の子供に買はれけり

瀬戸雄二郎

変な子と言はれ亀の子欲しかりし

山岸弘子

— 以上特選

亀の子の世話為さぬまま家離る

町野広子

亀の子の負ひし時代の重荷かな

青木鶴城

首擡もたぐる亀の子に空果てもなし

丸山マスマ

持て余し詫びて亀の子神の池

新 曆文

饒舌な娘と聞き上手なる子亀ゐて

大塚茂子

亀の子にあるや長寿のデーエヌエー

阿部幸代

亀の子にかけの一言一日終ふ

湯浅 和

亀の子を指して動かぬ子の多き

新井孝磨

亀の子やひつくり返るに見入る午後

山中いちい

強面の漢が愛でる子亀かな

荒井俱子

亀の子やそつちの水は塩っぱいぞ

河野はるみ

亀の子の甲羅の苔を拭いてやる

飯田忠男

買ひきたる亀の子の名をあれこれと	池田雅夫	亀の子に夜逃げされたる腕白子	加藤でん治
亀の子のすでに翁の面構へ	石川理恵	亀の子の縁側歩く昼下がり	木村るみ子
胸騒ぎ亀の子やはり脱走す	石田慶子	銭亀に先づ「ただいま」と男の子	熊倉千重子
亀の子の手足ばたばた裏返り	井関礼子	亀の子や書類を書きて子の友に	小駒さち子
四肢抜け浮いては沈む子亀かな	井上燈女	あと少しもうちよつとだけ亀の子と	越田栄子
亀の子の一万年は夜店から	井口俊晴	亀の子の波に揉まれて沖に行く	後藤綾子
亀の子の手探り行くや未知の海	上戸千津子	なぶるまじ命の限り這ふ子亀	近藤徹平
亀の子や主張はじむる三歳児	内田恵子	甲羅干す亀の子親の背の上	斎藤みよ
独り居の和む夕餉や亀の子と	梅澤輝翠	親亀と並ぶ子亀の甲羅干し	笹本啓子
亀の子の一途な歩み大海へ	梅澤佐江	亀の子の重なり合つて甲羅干し	渋谷きいち
亀の子海へ泳ぎきつたり砂千里	大場順子	亀の子を眺めて触れて突く吾子	下川光子
亀の子の前へ前にと我武者羅に	岡田宣子	大海を目掛く亀の子徒競走	菅原卓郎

亀の子の進まぬ泳ぎ空青し	菅原真理	緑日の亀の子囲む子供達	外村紀子
大海へ父母を知らねど子亀行く	杉浦理恵	海亀の子の旅立や夜の浜	仲田利子
亀の子の四十年後は主の貌	諏訪サヨ子	亀の子や足早に走るかくれ宿	南條きわゑ
水槽へ買ひ来し子亀仲間入り	関谷多美子	自転車籠に亀の子塾帰り	西浦千枝子
亀の子の匍匐前進通学路	染谷正信	亀の子は足をだらりと甲羅干し	西幅公子
亀の子ら汀へ神に導かれ	反町 修	銭亀に幼動かぬ露店前	野口和子
この子亀生まれ育ちは大庭園	高島寛治	子ども食堂のアイドル亀の子よ	野田静香
銭亀や平次の十手きらめきぬ	高橋満耶子	親亀は亀の子を背に甲羅干し	野平美紗子
飛石の亀の子小突く棒の先	武田重子	亀の子も一とかたまりに岩の上	橋本京子
夜明け前亀の子海へ急ぎ足	田中章嘉	好学の亀の子集ふ三四郎池	原田秀子
銭亀と吾子の顔浮く洗面器	鳥羽和風	日方へと亀の子鼻を広げをり	樋口元美
亀の子束子片隅にある存在感	飛永 鼓	亀の子や万年先は如何な世ぞ	日高道を

亀の子のぎょうさんいてはる用水路

檜鼻ことは

亀の子の親の背より落ちにけり

森 和子

「ペット不可」に住み銭亀買つてやり

福田千春

大海をめざし亀の子まつしぐら

森川義子

銭亀と話の通ふ三歳児

藤澤喜久

飛び込むをためらひがちの子亀かな

森下美智枝

亀は万年おのれ己の歩み信じ行く

古池恵里子

亀の子のヨチヨチ急ぐ海原へ

森本早苗

亀の子が五重塔を仰ぎゐる

保坂翔太

少年は亀の子を掌に愛撫する

山田美佐尾

亀の子を誘ふ月下の波の音

曲淵徹雄

きつとみな爺様似なる亀の子や

横山礼子

亀の子は家宝の鉢を住まひとす

正木萬蝶

今年度「山紫賞」の鳥羽和風氏は第二次世界大戦で父

あどけなき亀の子の目よ手も足も

松井由紀子

上を亡くされ、靖国神社のみたま祭に献句されて入選さ
れました。
(編集部)

池石に亀の子どんと構へけり

宮崎紫水

街薄暑盲導犬の眼に力

母待つ石に手足こちよこちよ亀の子等

宮崎チアキ

入選句及び特別献句はみたま祭期間中、懸雪洞に清書

亀の子やいざ水遁のダイビング

村杉清吉

の上、境内にて御披露目致します。

母恋うて海へ一途に亀の子は

本橋稀香

みたま祭 自七月十三日 至七月十六日
靖国神社社務所

山紫集作品評

網野月を

亀の子の世話為さぬまま家離る 町野広子

中七の「世話為さ」ずに「家離」れたのは、作者自身なのであろうか、それとも家族の誰かなのであろうか。飼い亀に対して少々、後ろめたい気持ちがあるように見える。作者自身ならばお出かけして帰宅後に「世話」すればよいので、ちよつと待っててね、といった具合であろう。家族の誰かの場合は、「世話」をしないでいる誰かへの譴責の念を含んでいるかもしれない。また何らかの理由で家族の誰かが住まいを別にする事になって、亀を実家に残して行ったとしても深読みできるだろう。むしろそう解釈した方が、作者の意図にあっているのではないだろうか。この場合は、亀よりも別居することになった家族の健康を気遣い安全を祈る気持ちを汲むことも出来る。「……まま家離る」の措辞の客観的描写が俳句としての信頼性を高めている。

首擡ぐる亀の子に空果てもなし 丸山マスミ

地面もしくは水面に生きるものにとつては、空の高さは時として果てしなく感じるものなのである。上五の「首擡ぐ」の動作が諦めにも似た感傷を引き出しているかも知れないが、筆者は「亀の子」であるから、その空への夢を抱いたと敢えて解釈したのである。大宇宙から見れば、実際に亀も人間も同様に微細な存在なのである。座五の「果てもなし」は「亀の子」の認知した世界というよりも作者が「亀の子」と「空」の隔たりを客観的に捉えていることを裏付けている。そこには冷静な視線を感じ取ることが出来る。

饒舌な娘と聞き上手なる子亀あて 大塚茂子

「娘」と「子亀」の関係性はどのようなものなのであろうか。会話をしているのは、作者自身と娘であろうけれども、娘の話し相手を子亀にしているところに諧謔性がある。九七五のリズムに饒舌さが投影されているようである。

亀の子にかける一言一日終ふ 湯浅 和

どうも亀には人格を認める俳人が多いようである。金魚玉の金魚や鳥かごの鸚鵡などにも声を掛けるシーンがあるのだが、亀は特別な存在感を示しているようだ。亀の一見、哲学者風の風貌がなせる業であらうか。中七から座五へかけての句意と、中七と座五の間の切れの存在とがバランスよく構成

されている。「一言」が作者のルーティンになっているのであるか。

亀の子やひつくり返るに見入る午後 山中いちい

「ひつくり返る」のは亀の動作であり、「見入る」のは作者の動作である。二つの動詞の主語が転換しているのである。その転換を「……に」の助詞で繋げている。通常は助詞「に」は説明的になりやすく、散文的なリズムを醸し出すので嫌われるのであるが、見事に一句にまとめた。上五の切れ字「や」が効果抜群であるからだろう。

亀の子やそつちの水は塩つばいぞ 河野はるみ

普通は蛸への呼びかけなのだが、「亀の子」へ向けられた作者の注意喚起である。上五の切れ字「や」は「亀の子よ」のようにも読めて面白い。『広辞苑』では「塩つばい」であるが「国語大辞典」などには「塩ばい」の表記で掲載されている。原句のように「つ」を入れた方が俳句としては丁寧な表現になると考える。

亀の子の渡る瓢箪池平ら 榊原聰子

神社はじめ仏閣などにも、瓢箪池や心字池と言ったものが設けられていることが多い。子亀の安らかなることを祈る心情に溢れている。中七と座五の十二音を一気に読み下すようにして詠んだ、いわゆる句跨りの句なのだが、「平ら」を末尾に配置したことでリズムが整っている。

亀の子やラグビー戦の合言葉 鈴木藻好

ラグビーにおいては、亀の姿勢をしてロータックルの低さを練習し、体得する。この低さを保持するためには、強靱な腹筋と背筋が必須なのである。上五の切れ字に拠って、「亀の子」へお前もラグビーをしているのかよと呼び掛けているような気分を表現しているのだろう。

亀の子の異土の子供に買はれけり 瀬戸雄二郎

「異土」は漢語的響きを持つが、日本語として使用されてからも一千年以上の歴史を持っているようである。辞典辞書などには、「異国の土地。外国。」「自分の故郷や国と異なる土地。異国の土地。異国。異郷。」などの記載がある。それだけに、「異土」は堅い響きを有していて、突き放した句意は客観的な表現を引き出しているようだ。筆者は、この「亀の子」にペーソスを感じる。

変な子と言はれ亀の子欲しかりし 山岸弘子

作者曰く、「亀の子」を「欲し」がる子は、イコール「変な子」なのであるが、既に「変な子と言はれ」ているから、「亀の子」に執心しても良いでしょう、と幾分開き直ったところがこの子にはあるようだ。日頃の自分への評価を逆手にとって、自己を完遂しようとしている。作者ご自身の思い出なのか、眼前で作者が見ている光景なのか、伺ってみた。

大村節代 選

鼓
笛
集

輕嶋の子や宮司徒へ神池へ
若人の弓絞る手や風薫る
無人駅下車ひとりなり夕焼空

村杉清吉

尺蠖やラジオ体操三拍子
空海の餉運ぶ僧むかへ梅雨
適齡期過ぎし横顔桐の花

池田珪子

たどりつく緑陰しばしオアシスに
緑陰に読み耽けるなりモーパッサン
サスペンス読めば尾を引く夏の夜半

山岸久美子

ポピー畑ポニーテールの駆けてくる
緑蔭の嬰むちむちの足万歳
緑蔭やパンドゥーラ弾く彼の愁ひ

鈴木玲子

青葉風一気に読みし句集かな
燕の子尾つぼ見へたり隠れたり
河鹿鳴く古里目指し子らと行く

南條きわゑ

月見草と言はれし妻の寢息かな
会ふよりも逢ふの似合の螢の夜
手を丸め優しく螢放しけり

新 曆文

再会の笑み声はづむ花菖蒲
夕焼けや路上ライブの反戦歌
鴨涼し寄り添ひ泳ぐ親子かな

木村るみ子

沢紫陽花ひびく太鼓の乱れ打ち
かぐら舞ふ巫女のかんざし濃紫陽花
額の花めがね美人になりたくて

高橋満耶子

乙女子の夢叶へてよ合歡の花
夭折の女人憩ふや夏木立
青簾祇園花街火点し頃

佐藤克之

男なら友となりたや夏の草
波誘ふ暑き砂地の浜辺かな
鰻重の価値を吊り上ぐ器かな

安倍弘夫

古里の母の笑顔や花あやめ
眠る子に団扇の風を送りけり
団扇手に友と急ぎぬ太鼓の音

高原和子

若人の髪の光るや五月なり
サイダーをかざして見れば海の中
土焼の器に似合ひの豆の飯

奥山粉雪

紫陽花やサラダを装ふ皿二枚
トマトそば白磁の皿に装ひけり
雄叫びのウエーブの如し麦の秋

秋谷風舎

新聞屋バイクととと朝曇
熱帯夜外に諍ふ二三
まくなぎを払ひて人の歩を止める

水落守伊

通信添削指導のご案内

季音同人を除く水明会員を対象に、通信添削指導を実施しています。

希望者は、下記により作品を送って下さい。 主宰 山本鬼之介

[指導者] 網野月を

[作品] 5句 [受講料] 1,000円

[方法] ①用紙自由 ②住所・氏名・電話番号を明記 ③84円切手を同封 ④返信用封筒は 不要 ⑤締切なしで随時受付

[送付先] 網野月を 電話 080-7580-0208

〒338-0012 さいたま市中央区大戸1-31-2

鼓笛集作品評

大村節代

輕鴨の子や宮司従へ神池へ 村杉清吉

輕鴨は瞬つてしばらくすると、列になって、親鳥のあとに従って移動する。その愛らしい姿は、テレビでもおなじみの景である。掲句は親鳥に従う輕鴨の子を宮司が見守っているのであろう。それを「宮司従へ」の中七に思わず笑みが浮ぶ。

適齡期過ぎし横顔桐の花 池田珪子

民法上の婚姻開始年齢は、現在は男女共十八歳と定められている。十八歳で名実共に成人なのである。

ところが親はいつまでも子が、特に娘が心配で、面と向かって言うのと嫌がられるので、横顔を見て溜息をつく。しかし心配ご無用、今は適齡期に年齢制限はなく、本人がその気になった時が適齡期と思う。

鼓笛集巻頭（七月号）

私の好きな一句（自句自解） 渋谷きいち

百二歳 母 渾身の 賀状 書く

私の母は今年五月で百三歳の誕生日を迎えました。その母が今年の年賀状をどうしても書きたいと希望し、一通だけ足の不自由な姪の為に筆を取りました。痺れ震える手で懸命に「ガンバレ」とだけ書き満足の様子でありました。

しかし乍ら、この半年で母のまだら惚けが一気に進み、現在市の施設にお世話になり、最後の「ガンバリ」を見せているところです。

サスペンス読めば尾を引く夏の夜半 山岸久美子

あと一頁、あと少しと、どうしても気になるサスペンス、つい遅くまで読み耽つてしまふ。誰もが何度か経験をしたであろう。素直な句に共感する。

俳誌望見

梅澤佐江

【新月】 令和四年五月号 通巻一二三三号

代表 松田碧霞 発行所 埼玉県さいたま市

平成二四年三月、渡辺恭子が「曲水」終刊後さいたままで創刊。師系渡辺水巴。我れを余所にして我れの俳句はあり得ない。(月刊)

代表詠「久伊豆神社」一〇句より

朝香宮殿下賜の裔

翅全開孔雀踊りし花の昼

武州岩槻の総鎮守、江戸の鬼門除けとしても名高い由緒ある久伊豆神社。ここで飼育されている孔雀は、朝香宮殿下より拝受した三羽の子孫と知れば、満開の桜の下、美しい翅を全開に舞うように歩く姿は尚更に神しくもあり、その高貴さに作者も思わず魅入ってしまうのであった。

のどけしや鳥屋の神鶏長鳴けり

目を転じると、小屋の神鶏が長鳴きを始めた。何とも心も伸び伸びして来ような春らしい日和であること。

厄割石割れて四月の厄落とす

厄割石で心と身体の邪気を払い、四月の厄を落とされたご様子、何よりと。

花吹雪御霊やすらぐ忠魂碑

この神社には、日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦・大東亜戦争に於いて、我が国の為に尊い命を捧げられた英霊に

感謝と崇敬の念を捧げる「忠魂碑」が建立されている。花吹雪が「忠魂碑」に舞い散る時、数多の御霊を鎮め安らぎを齎してくれていると思える瞬間であった。「花吹雪」と「忠魂碑」が響き合い、無常観の極みである。

停戦をひたすら祈る暮春かな

四句までの穏やかで静かな景に対し、五句目の緊迫感、早春の侵攻からもう春も終ろうとしているのに未だに終息が見えない。無辜の民を犠牲にする不当な侵略戦争が一日も早く停戦となるよう、只管祈らずには居られない作者がいる。「暮春かな」の座五が心に沁みる。

新月集(Ⅰ) 二名 各五句より

直線の美しき参道木の芽風 大野南蒼

ふらここの涙はかくも鹹らき 洲浜ゆき

新月集(Ⅱ) 三七名 各五句より

風光る利根大堰の水こだま 畑中良子

竹林の閃光となり初蝶来 松本喜久子

母と子の手波を添へて雛流す 岡村百合子

絶壁を這ひ上がる波夏つばめ 鈴木秀朗

大鏡に映す春の燈迎賓館 野仲まさ子

新月句帖 代表選 二七名 各五句より

富士くつきり見ゆるも馳走春疾風 貝原靖湖

掛軸を仏画に替へる入彼岸 梅谷静子

頬刺の鮮度確かな夕餉かな 稲葉峻山

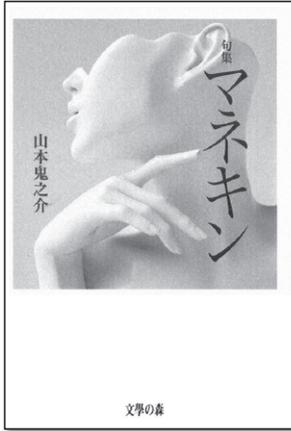
目刺焼くふる里遠くなりけり 吉成岬人

制服の採寸終へし合格子 門間レイ子

『俳句界』

二〇二二年七月号

ピックアップ注目の句集



文学の森

自選5句

燕にも五代の家格蔵の町
花吹雪ビッグシップの船出かな
葉柳やむかし銀座に点灯夫
くるがねの匂ふ水こそかな女の忌
マネキンを目白へ運び冬霞



やまもと・きのすけ

1938年東京都杉並区生まれ。本名・弘。

71年「水明」入会。

73年同人誌「面の会」入会。

79年「水明」無鑑査同人。

2014年「水明」副主宰就任。

18年「水明」第五代主宰を継承。

水明賞、季音賞、かな女賞受賞。

現代俳句協会会員、さいたま文藝家協会会員。

よみうりカルチャー北千住講師。

◆エッセイ

「マネキンの指―わが句集を語る」

俳句の道に足を踏み入れてから五十年経って上梓した句集『マネキン』を、吾が分身のように思いながら暮らしている。

昭和四十七年十二月某日朝、通勤途上のJR京浜東北線の車窓より、線路沿いの工房から運び出されたマネキン人形が、軽トラックに積み込まれているのを一瞬眼に留めたことが思

わぬ幸いをもたらした。マネキンとの偶然の出会いが生涯の代表句を産む結果となった。昨秋、出版元の「文学の森」書籍編集部から、表紙カバーのデザイン見本三種が送られてきたが、即座にA案のデザインを選んだ。彼の日に遭遇したあの純白のマネキンが、長いしなやかな指の手で吾を差し招いているかのように思えたからである。

それにつけても、あの時、なぜ「目白」という地名が浮かんだのか、今もって判らない。雑詠選者・三橋敏雄氏の克明かつ的確な講評を読んで、なるほどと深く頷いた自分であったが、俳句の青二才の身としては当然のことであったと言えよう。あの時の記憶としては、とにかく「三音の地名」を模索するのが精々であったが、さすがに「目黒」は駄目だと思つた。「マネキン」の白に対して「目白」の白の取合せを意識していたのかも知れない。

あのマネキン人形が、晩年の我が身に斯様に影響をもたらすとは夢にも思っていないかつたが、出会いの場となったマネキン工房は、現在もあの時のまま京浜東北線の南浦和と蕨駅の間に在り、立派なビルに建て替えられて本社も其処にある。句集を持参して一度訪ねてみたいと思つているが、四方山話を傾けてもらえれば至上の喜びとなるう。

『マネキン』のページ促す若葉風

鬼之介

山本鬼之介句集『マネキン』鑑賞

句集『マネキン』 偶感

澤 好摩 [円錐]

長谷川かな女を創始とする俳誌「水明」の第五代主宰者である山本鬼之介が、俳歴五十年に至って初めて上梓したのが、この度の句集『マネキン』である。厳選の末の八三七句を取録の、三〇〇頁に余る大部の一冊となっている。

山本鬼之介主宰からわざわざ句集評の依頼を受けたこともあって、同句集を繰り返し読ませてもらったのは当然のこととして、その結果として、これは容易ならぬ批評を引き受けたと思うに至った。そのことについてはおおいに触れることとして、まずは、次の句を見て戴こう。

三鬼が叫ぶ紫黄よく来た忠治をやれ

この句で紫黄とあるのは、著者の兄である山本紫黄のことで、「水明」「断崖」(のちに「面の会」)、「俳句評論」に所属し、秀れた句を書いた人であるが、二〇〇七年に八十六歳で逝去された。ところで、山本紫黄という人には芸達者な一面があり、新国劇や大衆演劇

で有名な国定忠治の「赤城の山も今宵限り……」の台詞とともに、赤城山の別れの場面を演じるのが実に巧みであった。それは単なる隠し芸の域を超えていた。私も「俳句評論」の忘年会において、一度拝見したことがあるが、西東三鬼存命の当時、山本紫黄と会うと、三鬼も度々その演技を所望したことが窺える句である。

このような作品を書く人らしく、山本鬼之介の俳句には、昔から東京の下町に住んでいる、いわば中産階級以上の人々の間に伝えられて来たに違いない艶なる情趣というか、江戸趣味に通う世界が色濃く漂う作品が少なくないのである。

色里の名残の道を黒揚羽

新内の三味の二上り夏座敷

愚痴を聞く女将に春の長火鉢

夏足袋や一差舞ふも旦那芸

午後四時の待合茶屋の秋燈

茶屋あそびしたる気分に朧月

また、時代劇の一場面を思わせるような、

猫の恋むかし夜盗も屋根伝ひ

仕込み杖あらば絵になる野分原

影武者もまた落武者よ山眠る

城址に佇てば軍師ぞ麦の秋

人馬はるけき川中島の秋景色

「村正」の刃文が招く春の雷

などの句も数多く存在する。

正直いうと、山本鬼之介という俳人が、こういう作品世界を展開していることを知らなかった。勿論、これらの作品は作品として、存在意義を認めるのにやぶさかではない。江戸から東京へと引き継がれて来た文化的側面がこれらの作品に存在するのは確かなことであろう。しかしながら、私が俳句として認識してきたものとの間に、少なからぬ乖離があるのも、また事実なのである。

俳句を書き、また、他人の作品を読む時などに、ふと、「俳句とは何か」を改めて考えたりする。ふだんは自分なりの書き方や考え方に慣れてしまっているが、ある契機にそのことのもたらす陥穽^{かたせき}に気づかせられることがある。そんな契機として今回の『マネキン』

もあつたといつていいかも知れない。

そんなことを思つたのは、今回、江戸趣味なり近代の風俗をモチーフとした作品の、一種の割り切り方の明朗さのようなものに戸惑つたことに因を發している。つまり、俳句が書かれるに先立つて或る種の發想があり、その發想がある言葉（季語を含めて）と早々と出会うことで一句が成立しているのである。先にこれは容易ならぬ評を引き受けたと書いたのは、このことに関わっている。俳句を書く上で、私が学んだことの一つには、先験的に存在する事柄をなぞる形で、如何ように書くことも、それは俳句ではあり得ない、ということがあつた。

やや、極端な例にはなるが、〈猫の恋むかし夜盗も屋根伝ひ〉の場合、「夜盗も屋根伝ひ」は、時代劇ファンならずとも既に周知の事で、そこに同じく「屋根伝ひ」に歩く恋猫を配することによって、有季定型の一句が誕生している。結局は「屋根伝ひ」する「夜盗」が、俳句を書くに先立つて發想としてあり、それを類推によって「恋の猫」を導き出し、發想の作品化を補完しているといえる。とはいえ、俳句を書くということは、当初の發想通りに道筋を辿ることにはなく、言葉をあ

もし、こうもすることで、当初の予想にはない新たな地平に出て行き、そこに思わぬ發見を期待することではなかったか。着想した時点で、俳句を書く一切の問題が決まるのでは、俳句の愉しみも苦しみも始まらないと思うが、いかがであろうか。

一方で、「マネキン」には、いままで触れた作品とは別種の、山本鬼之介本来のナイーヴな感性が捉えた作品があることを言つておかねば片手落ちになる。

薬が樹になる頃の二人かな
春深く墓といふ字の墓石かな

松明と入れかはりゆく冬霞

木の芽雨傘さすほどのこともなく

寒西今名は名のみの富士見坂

笹舟の出てこぬ土橋竹の秋

描きすすむ眠き少女とさくらんぼ

湯豆腐にうかぶ昔の葛西橋

これらの作品から、作者の素顔に出会つた感じがしたというのが本音である。

〈薬が樹になる頃の二人かな〉には、薬の頃のふたりと、それが樹になるまでに流れた時間と、ふたりに訪れた変化と現在の在りよ

う、また、このふたりの関係性など、さまざまに思いは誘われる。

〈春深く墓といふ字の墓石かな〉からは、一見して墓石であることは明瞭なのに、碑銘に「墓」という字がある一種の空虚さと深まる春との照応が見事。

〈木の芽雨傘さすほどのこともなく〉は、「木の芽雨」なる季語の本意に則つた作品。何気なさの中に言い尽くせない情趣が潜む。

〈笹舟の出てこぬ土橋竹の秋〉は、土橋の下に入った笹舟が一向に出てこない不思議さに、少年のような弾む心が活写されている。

〈描きすすむ眠き少女とさくらんぼ〉は、不思議な感覚の作品で、最も惹かれた。この句では「眠き」が句の重要なポイント。

〈湯豆腐にうかぶ昔の葛西橋〉。私の知る旧葛西橋は木造の、しかも穴だらけの橋。その上、昭和三十八年に廃止されるまでトラックやボンネットバスが走っていたのである。「湯豆腐にうかぶ」は、橋の危うさの喩としての役割を担うものである。

考えてみれば著者は荒川の上流の浦和に、私は下流の葛西橋近くに住んでおり、一つの川で繋がっている。河繋がりの縁を以て、拙き句集評を御容赦願いたい。

くろがねの句ふ水こそかな女の忌

「水明」の創設者、長谷川かな女の忌日は九月二十二日である。杉並区堀ノ内の福相寺で修されてきた。そこでの持成しが「くろがねの句ふ水」であろうかと推測する。事実関係は兎も角、「くろがねの句ふ」が「かな女の忌」の本情を担保している。茶なり水なりが鉄臭いのである。文字通り「くろがね」のイメージがかな女に通じるものがあるのである。戦後の俳句界で活躍する長谷川かな女を熟知している作者の率直な言説なのではあるまいか。

句集には「かな女の忌」の句として他に〈千羽目の鶴折るかな女りんどう忌〉〈見得を切る寿司の助六かな女の忌〉〈全集の五年目の白かな女の忌〉があり、他にも関連の句としては〈千号の年の雪踏みかな女句碑〉〈夢でかな女と令和を語る目借時〉〈年頃のかな女の写真秋の昼〉などの収録句がある。副主宰、主宰として「水明」俳句会を牽引してきた作者は、会主催の「かな女の忌」を修す立場にあれば、至極最もなことなのである。

剣客の本読み終へて蚊を睨む

「水明」第五代山本鬼之介主宰は、昭和四十年からの句歴を誇る。しかし『マネキン』が初句集なので、句数に圧倒され、恐る恐る句集の頁を繰る。すると読手より先に作者が、大真面目で、軽妙洒脱な世界に浸っている。その句の数々に、時の経つのも忘れて引き込まれ句を追った。

掲句は「水明」の「夏行」の折の句である。主宰は何と、背中に大きな鬼の一字を染め抜いたTシャツで現れた。そして、一心不乱に作句を始めると、背中の鬼の字も作句に協力している。やがて「剣客の本読み終へて」の上五、中七により、ご本人もさぞや剣客にあやかつてと出席者が思っていると、下五の「蚊を睨む」の洒脱さに、出席者一同、思わず吹き出した。

これぞ、兄、故山本紫黄にも共通する、自然と身についた粋、洒脱なのであろう。

堅炭や三代前は町火消

猫の恋むかし夜盗も屋根伝ひ

『鳴』

六月号

上総掘り(21) — 受贈俳誌紹介 —

和田紀夫

「水明(すいめい)」三月号(第九十五卷第三号)主宰 山本鬼之介

昭和五年九月、長谷川かな女が浦和市(当時)で創刊。「有季定型で自己の個性を活かした俳句を詠む」を標榜する。

まず表紙裏に今月のかな女の句として、次の句を載せる。

雛好きの母見ぬ室となりしかな

巻頭掲載の「不動明王」と題する主宰句八句の中より

全開の孔雀に会ふも春寒し

人形に入魂の眼を冴返る

羽を一杯に広げた孔雀の姿は、優雅で見る者を圧倒する。圧倒されつつも作者は、春の寒さの中にあることを実感している。「会ふも」の措辞が作者の心境を表していて見事。人形作りにおいて、眼を入れるのが最も難しい作業だと聞く。季語「冴返る」により人形師の全神経を集中する気魄が際立つ。

「季音 雪」は、二十五名の同人作品を五句ずつ載せる作品集。その中より

雪食めば僅かに埃臭きかな

文仕舞の書状ふせ置く雪明り

寒禽葬るからくれなゐの花の樹下

小面の美しき目ざし寒ざらへ

網野月を

石井喜恵

大橋迪代

大村節代

「季音 月」は、二十六名の同人作品を五句ずつ載せる作品集。その中より

天金の詩集の背文字日脚伸ぶ

母と子の帯直し合ふ初鏡

老医師と婦長のあ・うん冬日和

初騎の馬の鬣編み上げて

「季音 花」は、二十三名の同人の作品を五句ずつ載せる作品集。その中より

初鏡鶴の舞ふ帯胸高に

先客と香り分け合ふ探梅行

冬至粥真ん中に居る母の皺

「水明集」は、会員の作品を主宰の選により載せる作品集。

その中より

地母神の深き眠りや大枯野

五十年添うて乙夜の葛湯かな

おほつびらに軋む江ノ電冬めける

「山紫集」は、兼題「鷹」の句を網野月を氏の選により、載せる作品集。うち特選十二句の中より

老鷹のみじかく啼きて沼の暮

大鷹の舞ふや砂を畏れつつ

この他、会員による主宰句の鑑賞をはじめ、会員間の句鑑賞等を数多く載せる。

水明俳句会は、九十年を超える歴史を持つ結社であるが、掲載句からは、伝統の中にも個性豊かな表現を随所に感ずることができた。今後もぜひ素晴らしい歴史を重ねて行っていただきたい。

(筆者住所〒261-0012千葉市美浜区磯辺四一五—二〇)

梅澤佐江

森川義子

松井由紀子

内田恵子

井上玲子

野田静香

日高道を

西幅公子

染谷正信

曲淵徹雄

日高道を

正木萬蝶

句集喝采

近藤徹平

◆久下晴美「単眼鏡」

現代俳句協会

著者略歴 昭和三十一年埼玉県狭山市生。平成十三年「ペアーレ俳句教室」等入会。同十八年現代俳句協会「木曜教室」参加。同二十四年「紫の会」入会。同二十七年埼玉現代俳句大賞受賞。

秋風をまるく切り取る単眼鏡

句集の標題句。著者はあとがきに「瞬間を切り取り十七音に載せる俳句は、単眼鏡で覗く世界のようにだ」と記す。秋風という凡そ単眼鏡に映るはずのない現象を取合せて言葉の衝突が生み出す詩的興奮を讀者と共に楽しもうとしている。

新緑にゐて海底にゐる記憶

真つ青な地球の上にあて紅葉
水掻きも尻尾も持たず森林浴
ハンモック揺らし東方見聞録
しぐれをり熟睡できる北枕
黙食が辞書に載る日よ亀の鳴く

日常あり得ない取合せから詩的興奮を誘う句が並ぶ。第一句、新緑から海底に引込まれる気分。第二句、宇宙飛行士の見た地球から地上の紅葉へ。第三句、太古森林の動物から進化した人類の潜在意識が露わに。第四句、ハンモックからマルコポーロへ遙かな時空を溯る。第五句、死者を北枕に寝かせる風習を著者は俳句の題材にしてしまう。第六句、コロナ禍の蔓延で黙食はまもなく辞書に掲載される時代になる筈。

◆河内文雄「宇津呂比」

ふらんす堂

著者略歴 昭和二十四年岐阜県飛騨高山市生。平成二十八年「銀化」入会。令和二年『美知加計』、同三年『美知比幾』各句集刊。

ふらんす堂編集日記は著者がコロナ禍と戦う呼吸器内科の医師と記す。著者はあとがきに「脳梗塞の後遺症を俳句で治した実体験に基き本句集に失語症の読み薬としての効験を期待し、従って佳作を厳選して編集せずに言葉との格闘の経緯を科学者として赤裸々に掲載し、更に全ての句はトレーニングのため全て十三字に表記する制約を課した」と記す。

ふらここを運命線の握りしめ
夜は夜をうは書きしつっ薪能
翡翠や雨濯にそらの拭はれて
素麺と冷むぎ不仲なるうはさ
花むくげ対馬海峡とこしなへ
ワシコフの人相書を柘榴まで

第一句、運命線とは掌。第二句、上書とは新たな演目の始まり。第三句、雨濯とは陰曆六月の雨とか、博識に敬意。第四句、JASで乾麺の内径が一・三ミリ以下を素麺、一・三以下一・七ミリの冷や麦と呼ぶ、噂が面白い。第五句、木槿は対馬海峡対岸の韓国の国花。第六句、昭和初期新興俳句運動で活躍した西東三鬼の句「露人ワシコフ叫びて石榴打ち落す」に拠る句か。俳句で脳梗塞を克服し次作以降の標題も確定済。

合宿所の青黴黒黴煙

母の嘘する為のくれなむ虞美人草
手折らるる母のくれなむ虞美人草

あぢさゝみやどこか楽しき雨の午後
美人画の団扇が起こす江戸の風

黴の書の表紙を化粧ふ丁子引
目標も当ても定めずなめくちり

流水の白く寝そべる夏河原
黴の花パン一斤を持て余す

セルを着て五臓六腑に風通す
黴の香や父の手馴れの聴診器

青春の交換ノート黴匂ふ
片蔭に幌を休める人力車

第四例会 (浦和)

境 延昭 喜恵 報

南風吹く郷土玩具が首を振る
夜更しの古書肆を慕ふ火取虫

はえ立つや活気漲る鮎漁
あぶな絵の隠し処を火取虫

南吹く巖流島の潮速し
南風吹く大クレーンの仁王立

母港へと南風を孕み練習船
舞ひ込みし火蛾と一駅同席す

屯する若者静か灯蛾舞ふ

萬 蝶

〃

〃

雅 夫

〃

〃

〃

順 子

昇

〃

寛 治

昇

延 昭

翔 太

マスマ

順 修

〃

〃

恵 子

後ジテは知盛の霊火蛾の舞ふ
南風に翁と犬と踏んばりぬ

基地の風今も昔も南風
南風袖の里に機の音

火蛾舞ふや団欒しばし黙の中
手旗信号「ジョウリクヨウイ」南風吹く

火蛾掃くや素顔の女将の大あくび
金粉に塗れて火蛾の狂ひけり

火蛾狂ふ場末にロマのフラメンコ
蕉翁の墓に献花を南風

書きかけの文へ読点火取虫
南吹くからつと揚がるえびフライ

沖雲に湧きゆく力明け易し
母の夢ひとりじめして短き夜

短夜やテレビで寝落ち夢で起き
雨夜の光が走る蜘蛛の糸

蜘蛛の巣の真珠光りや雨上り
校具小屋に入るをためらふ小蜘蛛の糸

玄関に置く短夜の旅仕度
明易し推理小説読み耽る

大蜘蛛や破戒僧めく囀の真中
朝の蜘蛛お出ましましありて佳日かな

マスマ

光 子

延 昭

光 弥

翔 太

順 子

〃

〃

第五例会 (浦和)

梅澤 佐江 報

河野はるみ

水 尾

〃

理 恵

玲 子

義 子

佐 江

〃

〃

〃

山葵田の水は清冽明早し
短夜のワインの余韻鳥の声

初鱈遠州灘の器量良し
細き恋残しすずらん去りしかな

遠縁の男児預り梅雨の晴
リモートの遠忌法要燕子花

黒南風や遠流の島の渡し船
遙か来て心も遠出桜桃忌

紫蘭群生遠流の囲み屋敷裏
鈴蘭やアイヌ口伝の悲話情話

スズランの鉢を並べて純喫茶
遠い目で棚田眺める青蛙

鈴蘭の白となりたる森の陽よ
鈴蘭の花鳴る時は秘密だよ

片恋の少女の涙君影草
鈴蘭挿すグラスに透ける猫の顔

鈴蘭や「デイオリッシンモ」を纏ひし日
夏柳三味を小脇に楽屋入り

背負ふもの多き山行君影草
すずらんにしやがみ娘はあどけなく

東欧の銃声止まぬ麦の秋
すずらんや清楚な妻は毒を秘め

おじぎする侍者は鈴蘭森の口

玲 子

佐 江

萬 蝶

石田慶子 報

正木萬蝶

〃

〃

以上特選

月 晴

俊 子

京 子

倭 子

鶴 城

マスマ

〃

〃

〃

〃

握る掌の湿る夜道や君影草

萬蝶

関西例会（大阪）

森本早苗報

明日登る山黒ぐろと遠河鹿

ゆら女

まくなぎに待たれてゐたる逢瀬かな

玲子

泊船のきらめく燈火青時雨

和子

行くほどに瀬音高まり夕河鹿

道子

清流に洗ふ飯盒夕河鹿

早苗

螢合戦一期一会の千種川

〃

活断層曝せしままを恋螢

〃

——以上特選

水軍の裔の喚声大雨風

玲子

谷川の流れに共鳴河鹿笛

礼子

夕暮れや家路を急かす時計草

千津子

白鷺や加茂の中州に舞ふ阿国

ゆら女

亀の子や太郎乗せたは父か祖父か

洋子

山の子はいつも早足遠河鹿

和子

時の日や間歌泉の噴くを待つ

道子

梅を挽ぐ紀州の富士に真向ひて

千枝子

風薫る支部長を終へ花束を

千世子

犬猫にマイクロチップ走り梅雨

満耶子

青葉風一氣に読みし句集かな

さわゑ

河鹿鳴く仏母の御座す天上寺

早苗

☆ ☆

昔話あれこれ 18

軽太子捕わる

この密通事件を知つて、人々は軽太子のもとを離れ、弟の穴穂の皇子（第二十代安閑天皇）に心を寄せた。軽太子は大前小前宿禰の家に逃げ込んだ。

穴穂の皇子は軍勢を集めて大前小前宿禰の家を包囲した。大前小前宿禰は「わが皇子よ。兄上を逮捕しよう」と我が家に攻め入りなさいますな。もしそうすれば、同母兄弟の道や情に倅ると人々が笑うでしょう。私が兄上を捕まえて引き渡しましょう。」と言つて軽太子を捕らえて差し出した。

捕らえられた皇子の詠んだ歌

あまたむ 軽の嬖子

いた泣かば 人知りぬべし

波佐の山の 鳩の 下泣きに泣く

（軽の乙女よ。ひどく泣いたら他人に知られてしまう。だから鳩がくぐもつた声で鳴くように忍

び泣きに泣いているのだね。）

また皇子の歌

あまとぶ 鳥も使ひそ 鶴が音の

聞こえむ時は わが名問はさね

（空を飛ぶ鳥も使者なのだ。鶴の声を聞いたなら、私の使者なのか聞いておくれ）

皇子は伊予の湯に配流となつた。

衣通姫は恋慕に耐えられず皇子の後を追つた。その時の歌。

君がゆき 日長くなりぬ やまたつの

迎へを行かむ 待つには待たじ

（貴方の旅も日数が長くなりまして。お迎えに参りましょう。これ以上待てません。）

このように歌い、二人は自ら命を絶つた。

※これらの歌は、歌垣で歌われていたものが『古事記』の中に組み込まれたと言われている。

また、『万葉集』90の歌

「君が行き日長くなりぬ山たつこの

迎へを往かむ待ちには待たじ」

は『古事記』のこの歌を引載したものであろう。

（つづく 丸山マスキ）

各地句会



柿の木塾 (浦和)

権禰宜が縁起を語る片蔭り
 強情は親の代より心太
 惜別の揺るる心や心太
 懸命に心太突く三代目
 湖風の通る片蔭箱根径
 足を止む路上ライブや片かげり
 境内に並ぶママチャリ片かげり
 片蔭を出ては又入る片蔭に

めだか句会 (浦和)

かたつむり見入る少女の肩に雨
 慰霊碑や時を重ねる木下闇
 麦秋や女兵士の肩に銃
 木下闇抜けて武將の廟所あり
 我れ無事で他人事なる出水かな
 自転車をともしに投げ出し木下闇

敦子 謙一 知子 育子 忠夫 和幸

昇 かつ子 俊晴 節代 水尾 和葉 恵子 和子

木下闇声の近さに驚きぬ

梅雨出水谷あひの村震へをり
 出水なきと願ふ農夫の心情よ
 ほほ多みて石仏ならぶ木下闇
 警報の空振りとなり出水の夜
 木下闇舌を動かす長きもの
 啼く主を語るうんちく木下闇
 夕闇や舗道を隠す大出水

はるみ 芳朗 美智 宏子 月を 鶴城 八千代 智子

コクーンシテイカルチャー俳句教室(さいたま新都心)

定刻に「のぞみ」突切る大植田
 纏まらぬ癖毛の髪や梅雨に入る
 卯波立ち鯨番屋の大竈
 露座仏の視線遙かに卯波立つ
 青蜥蜴草抜く妻と鉢合せ
 真夜中のダツカカのホテル蜥蜴の眼
 荒神興男地を蹴り宙を蹴り
 佐渡遙か卯波を砕く高速船

延昭 早都子 美枝子 俊晴 健司 淑子 俱子 昇

神戸大池句会 (神戸)

梅雨入り待つ六甲ブルーシチダンカ
 紫陽花の狭庭染めるも半世紀
 螢火の源氏と平家区別なし
 掌から掌へ渡す螢の滅続く

早苗 礼子 千津子 玲子

花衣の会 (浦和)

香水や少し気取りてフルコース
 香水を求め路地入るパリ六区
 一瞬の宙の青さや梅雨晴間
 紫陽花と挨拶交はず伸となり
 梅雨入りや古きアルバム皆若し

みよ みち 峯雄 章嘉 治

珊瑚の会 (浦和)

真つ先に朝日がくぐる夏越の輪
 戦国の女性も強し立葵
 咲き継ぎて天へのほらむ立葵
 小綺麗な男所帯や立葵
 立葵放し飼ひする矮鶏数羽
 小稲荷の幟色褪せ立葵
 稚抱きて茅の輪をくぐる若き父
 正論の時に疎まし立葵
 祢宜の杳肅くぐる大茅の輪
 夏祓すませ海の子まつしぐら
 立葵七年振りの善光寺

昇 恵子 史代 和子 広子 和葉 かつ子 喜恵 マスミ 水尾 節代

水明漣つくし句会 (大阪)

ロープウェイいざ万緑の只中へ
 万緑へ指したる指の白さかな
 万緑に築五十年も若返る
 漣れあひ風にほどけて夏の蝶

人美 きりり 洋子 智恵子

湖の香のびわ湖散策汗拭ひ
万緑のしめり芳はし丹の宮居

美 令
ゆら女

芙蓉句会 (浦和)

紫陽花や色定まらず庭の端
単衣裁つ母の使ひし尺定規
ほゝたるに誘はれ渡る石の橋
須雲川月影ほのか螢舞ふ
限りある命光らせ螢舞ふ
宵螢男やもめの肩に乗る

正 子
道 子
税 子
ともこ
美 子

円卓の会 (浦和)

綿菓子先つままれて夏銀河
黒南風や妖怪の住む美術館
ふるさとはいつも青空夏料理
黒南風や庭の雑草のびのびと
いじめられ青息吐息青蛙

輝 翠
静 香
亮 一
翔 太

黒南風やバックミラーは見たくない
片付かぬ日々のこまごま蟻地獄
ぐわぐわと西日蹴散らしダンブカー

月 太
鶴 城
道 を

水明松本句会 (松本)

雨粒をころがせ遊ぶ柿若葉
カーテンを開けてため息走り梅雨
手が触れてほのかに香るラベンダー
ピザ焼けて明かるき窓辺夏はじめ

陽 子
マリ子
玲 子
寿 子

たかな俳句会 (川口)

緑陰に流るる笛の二重奏
夏蒲団干して半日待ちわぶる
幼子や夏蒲団より足四本
緑蔭に憩ひし髪や風に舞ふ
夏蒲団父を越えたる子の背丈
ぼつねんと暮るる川辺や河鹿鳴く
緑陰を出づれば岬晶子の碑
夏掛の魚と泳ぐ子の手足

久美子
のり子
小麦
勢津子
義 子
鶴 城
水 尾
静 香

野ばらの会 (浦和)

紫の新じやがにあるインパクト
父の日や母亡き後の寄方なし
父の日や夫へ取り継ぐ子の電話
父の日や早世惜しむ白き薔薇
大小の新じやが駆け畝崩す

栄 子
茂 子
夏 江
秀 子
みき子

阜月の会 (浦和)

虹消えて返事なきま別れゆく
蝙蝠の乱舞夕陽を隠しをり
六月やちりめんじやこが到来す
返還や夏陽まぶしき優勝旗
玉葱を刻み悲しみ隠しをり
六月の山裾海へ千枚田
暮れなづむ空を切り裂く蚊食鳥
たまねぎの刻む音してカレーライス

光 代
珪 子
順 子
紀 子
静 香
孝 磨
暦 文
きいち

りんどう俳句会 (浦和)

迅雷や鶏庭を駆け惑ふ
黒光りの鰻暴るる竿の先
うなぎ屋の酒でまぎらす小半時
白山小屋足下に聞く雷の音
バリバリと空を切裂く雷火かな
土用鰻食はせてくれし勇なく
蒲焼の鰻に長子ふはりと来
知らで食ぶ値上げ前夜の鰻かな
鰻喰ふ土用丑の日営業部
鰻焼く見沼田の景煙らせて
老木の再生謀るはた神
土用鰻どこへも行けぬ母と食ぶ

翔 太
紀 子
卓 郎
利 子
君 夫
徹 雄
治 子
弘 夫
正 信
寛 治
サヨ子
順 子

青葉の会 (浦和)

十葉や臭に負けて抜ききれず
十葉を戸棚にしまふ祖母の知恵
根力の強き十葉また生えて
道端の十葉香る夕暮の雨
サングラス便利な隠れ蓑となり
底力秘めて十葉はびこりぬ
機上より小さき窓に五月富士
宅配便玄閑置きで梅雨に濡れ
きははれて十葉の白描き得ず

美 紗子
真 理
美 智枝
美 子
啓 子
公 子
和 子
洋 子
輝 翠

さざきサークル (浦和)

冷酒の利きたる頃や仕上げ蕎麦
髪洗ふ術後の朝の大吐息
難しき話は明日に冷し酒
洗ひ髪細き腕を愛しめり
冷酒や当ては生姜に紀文揚
更けやらぬ街騒を聞く冷し酒
冷し酒勧め上手な下戸の人
冷し酒盛り上がりたる犬談義
ミモザの会 (横浜)
緑陰やロードバイクの二人連れ
更衣母の残せしシャツ羽織り
若者の掛け合ひ稽古緑蔭に
緑陰や早朝ヨガに参加して
緑蔭をひとりじめして秋田犬
水彩の少女脱け出し緑蔭へ
緑蔭にハイネの詩集を開きをり
緑蔭に集ふ太極拳の黙

光が丘俳句教室 (東京)

紛れゆく師の影偲ぶ夏帽子
雨蛙腕白坊主の手の中に
雨がへる置き物のごと池の緑
わだかまりやうやく消えて額の花
白あぢさみの角を曲がれば濃紫陽花

昇 かつ子 啓子 俱子 和枝 喜代子 和子
慶子 栄子 玲子 由美子 亜弥子 萬蝶 史代 千春

若 鮎 句 会 (浦和)

回し読む文の折じわ桜桃忌
河鹿笛止みて瀬音の高まりぬ
静けさのやがて耐へかね河鹿鳴く
文楽の道行のふと桜桃忌
「ゲルニカ」の人の形やはたた神
夏座敷矩形に坐る縁者かな
桜桃忌ひねもすけぶる小雨かな
河鹿とはどんな蛙か見たきもの
夜の風の澱みを糺す河鹿笛
山椒魚こんな形で生きてます
桜桃忌ただ一色の暗き道
芽 吹 句 会 (浦和)
エレベーター五秒の中の梅雨湿り
バージンロード歩く父の日泣き笑ひ
百合の花歌舞伎役者のにらみかな
水無月や千百号の「水明誌」
梅雨空の月あはあはしラベル聴く
ホテルのロビー向きまごちに百合句ふ
小座敷のバランス崩す百合開花
梅雨の午後時の止まりし過疎の村

万美 芳春 亮一 さなえ 拓真 稀香 香音子 悦子 月城 鶴城 喜夫 正子 富子 修 千重子 玲子 千重子 道を

皐月雨音無く進む和船かな
紅の花光源氏の女たち
鷹山の消えぬ種火や紅の花
成立つるをそこらの背に皐月雨
羽の国の情にほだされ紅の花
君前に好きだと言へず紅の花
体調のころころ変はる五月かな
結の習はし今は昔や早苗月
鶴川山百合句会 (町田)
罌粟の花小言聞くとときや頭を下げよ
歳の差は追ひつけぬまま初鰹
風薫る藍の作務衣で通しけり
雛罌粟やラベンナの壁画見しあとの
昼酒は日向爛が佳し初鰹
雛罌粟や遠くに見ゆる新幹線
活気づく糶の男衆初がつを
初鰹粋を競ひて旦那衆
此の家のルーツは土佐よ初鰹
父近きぬ玻璃皿に盛る初鰹
初鰹厚切りにして漁師飯

寛治 久美子 曆文 道夫 雅夫 京子 マスミ 雄二郎 月を 喜久 史代 広子 由美子 千春 萬蝶 理恵 美千子 玲子 富美子 千重子 敦子 妙子

りそな俳句会 (浦和)
浮島の如き母屋や早苗月

建治郎 道を

櫛 の 会 (浦和)

坪庭の青葉さやさやすし処
青葉しぐれ歌碑のかな文字なるよに
箱根路は湧き立つがごと青葉山
山彦の行きつ戻りつ青葉風

青葉並木アンパンマンのバスが行く

湯の香り残りし肌し肌し青葉風

まつすぐな江の島大橋青葉風

無縁墓に青葉の影の薄明り

寂聴の論す声消え青しくれ

青葉中両手広げて深呼吸

風青葉育ちざかりのシャツを干す

山 茶 花 (浦和)

入梅や捌く袱紗のうす湿り

はまなすや海辺の小屋の荒れ果てて

家改築始めたとたん梅雨に入る

はまなすや遊覧船の無事祈る

入梅や傘いろいろと小学生

玫瑰の身にしむ色香白き浜

野 菊 の 会 (与野)

名画かな受胎告知の青水無月

麦秋や常に寝不足がちの山羊

つくづくと独りに慣れて柿の花

千支は野うさぎ星座は野山羊星まつり

黙々と草食む羊梅雨に入る

生徒みな体育座り夏つばめ

蘭 の 会 (浦和)

山裾に雲湧き上がる梅雨入かな

朋子

裕誌

彰二

克之

富子

文子

治子

マスマ

泰子

清一

美江子

光子

綾子

美代子

和子

清子

清子

まな

知子

光子

トエ

トエ

お地蔵の笠に傘かけ梅雨の入り

入梅や気温血圧定まらず

門前に花がらの敷く梅雨入かな

梅雨入やあぢさゝる色に染まる街

入梅や一杯飲屋の昼の客

ごめの声海の闇へのレクイエム

めざましき梅雨の草花人はいざ

つんのめり寄せ来る波に海猫さわく

お喋りなをとこと一緒梅雨に入る

慈悲心鳥母音の長き読経かな

心太突くや音なく沈みをり

櫻 蔭 句 会 (浦和)

雨音に目覚め茶を飲む明早し

短夜のあけていづこか鳩の声

短夜や夢の際よりバイク音

山小屋の雑魚寝の鼾明易し

歩をそろへくぐる茅の輪や神々し

短夜や曙光に溶くる茅の夢

土岐善磨の校歌の杜の茅の輪かな

明易しいそいそ畑へ野菜かご

結界の気を満身に大茅の輪

蛸 蛸 の 会 (浦和)

雲開けるリモコンボタン梅雨の空

梅雨の星闇に溶け入るフリーウェイ

まり子

夕峰

風舎

粉雪

正信

珪子

比早子

さよ子

月を

鶴城

京子

美子

千恵

真理

公子

茂子

由紀子

多美子

美智枝

幸代

ひさの

風舎

風舎

下駄箱のなかより顔を出す守宮

梅雨の星しつとり赤く隣きて

立て掛けた傘の余滴に梅雨の星

夜泣きする赤子あやすや梅雨の星

守宮住むどちらが珍客屋根職人

通学の道も徽章も白き百合

無愛想な守宮の奴と暮らしをり

命綱なしのクライム守宮かな

天井の守宮の影や忍者めく

あ ゆ み の 会 (浦和)

実梅受くジュースのレシビ添へられて

実梅もぐ彼奴は昔の餓鬼大将

公園の青梅ひそと熟れてゆく

瀬戸内や若葉と坂を共にする

長き坂立ち漕ぎの子の汗雫

三年坂坂が倍する暑さかな

和歌山水明句会 (和歌山)

かの夜より耳に棲みつく鈴河鹿

山門の刀痕ふかく青嵐

薔薇咲いて今日も忙しくなる予感

松葉杖の黄のランリツク青田風

独り占めの大海原やヨットの帆

石碑建ちダム湖映ゆるや初夏の午後

甘き水蜜袋に灯が点る

水張りて星さんざめく千枚田

るみ子

さち子

元美

朝香

しるく

礼子

月を

鶴城

宣子

圭子

俱子

山遊

重子

藻好

和子

道子

千枝子

千世子

満耶子

きわゑ

洋子

旭子

代子

代子

水明小川句会 (小川)

我庭にましろき花や夏来たる
冷蔵庫早く閉めてと鳴るプザー
六月や声の中にも雨がふる
予定表扉にべたり冷蔵庫

雛の会 (浦和)

朝焼や天地を分かつ乗鞍岳
雨蛙飛び乗る秘色のボンネット
夕焼を乗せ空つぼのロープウェイ
バス停に乗客の黙日の盛
夕風に白のさ揺らぎ韭の花

若狭水明会 (若狭)

茅葺のわが家なつかし夏つばめ
皇后のやさしき微笑白牡丹
少年の素振り百回夏燕
電線にならぶかどてや夏燕
庭に咲く三日天下の牡丹かな
初漕ぎの自転車往き来夏燕
母の日や畑も里も老い行きぬ
晩鐘を聞きて散りゆく緋の牡丹
指先を揃えし会釈白牡丹

水明熊谷句会 (熊谷)

翡翠やスマホの起動間に合はず
万緑の谷やトロック発車ベル
翡翠や狙ひ定めし岩の淵
万緑を揺らすアルペンホルンかな
かはせみを待つ目印の杭一つ
湧き水を守る万緑富士裾野

水明鬼石句会 (鬼石)

ままごとの赤い茶碗に棕櫚の花
コンニャクの芽の赤々と土かぶる
開く毬いづれ劣らぬ花四葩
梅雨寒や脱いだり着たり高齢者
花豆の少し甘めや梅雨の寒

新樹の会 (浦和)

空梅雨や田んぼアートの目に涙
校庭の土俵に小皺梅雨早
怪物の完全試合雲の峰
百姓が両手を睨む早梅雨
空梅雨や朝な夕な空念仏
早梅雨狛犬の口乾きけり
空梅雨や船頭の棹忙しなく

俳句の手ほどき (岩槻)

敬語なき田舎言葉や紅の花
灯蛾払ふ赤坂芸者置屋口
本心を殻に秘めたるかたつむり
陸すつば語れぬ恋や竹婦人
でむしに一万尺の石切場
暮れてなほ明るき水路蝸牛
妻払ふ紙魚や「源氏」の口語訳
語り継ぐ江島生島江戸風鈴
私語ひそごに聞き耳立てて蝸牛
蝸牛ブロック塀をゆつくりと
語り部の混じる友らとビール酌む
語尾上がる司書の訛や梅雨晴間
でむしに会へば八十路も童歌
曲り屋の民話語りや涼を呼ぶ
ふるさとをいきいき語る半夏雨

和子
ナヲ子
紀子
洋子
聡子

謹弔

平通
道を
修
正信
徹雄
清吉
鶴城
吉住光弥様 (季音同人) 六月二十四日
田中泰子様 (水明誌友) 七月一日
病気の為逝去されました。
謹んで哀悼申し上げます。

延昭

佐江
ます美
水尾

徹平
義子
翔太
忠男
美子
卓郎
幸代
桂子
久美子
かつ子

りんどう忌のご案内

【と き】 2022年9月27日（火曜日）

午後12時45分受付

【ところ】 浦和駅東口パルコ9階第15集会室

【会 費】 1,000円（昼食はありません、飲み物は各自持参してください）

投句数および兼題、投句締切、会費、申し込み等の詳細については、次号9月号にてご案内申し上げます。

事業部

好評発売中



定価1,980円(10%税込)
四六判/並製/188頁
ISBN978-4-04-884429-1

中村草田男、その魂の二十年を深耕する一冊。フランス思想にも造詣が深い著者が、深みの次元に照明をあてた画期的な草田男論。草田男句の鑑賞と著者の講演・評論で構成。

葡萄食ふ一語一語の如くにて

草田男

第4弾

草田男深耕
渡辺香根夫 編 横澤放川

角川俳句コレクション



 KADOKAWA

発行：角川文化振興財団 発売：株式会社 KADOKAWA

〒102-8177 東京都千代田区富士見 2-13-3 ●TEL. KADOKAWA 購入窓口 0570-002-008

俳句

9月号
予告

8月25日発売

予価950円(本体864円)®

特別作品 高野ムツオ・鈴木貞雄・津川絵理子

学びて思い、思いて学ぶ

俳句の学び方2022

総論 俳句を学ぶとはどういうことか：小川軽舟
各論 句会／吟行／結社／研究／多作多捨／読書／歳時記／遊びから得られるもの／インターネットの活用

大特集

特集

蘇る俳句 国会図書館に眠る俳書を読む

論考 埋もれた俳句を求めて
国会図書館に聞く俳誌保存の現状と課題

結社歳時記「藍花」 俳壇ヘッドライン

「水明創刊90周年記念および通巻一一〇〇号記念祝賀会」
第19回七夕まつり

好評連載「俳句の水脈・血脈」角谷昌子ほか

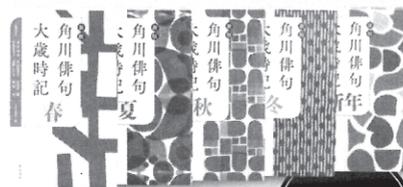
※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

本書の特色

見出し・傍題合わせて1万8000季語以上を収録
旧版より110%以上増ページで、より充実した内容に
現俳壇を代表する俳人・研究者による監修・執筆
例句数5万句超。近年の秀句もふまへ
旧版から大幅に刷新



2022年
5月31日
「夏」刊行

特設サイト
OPEN!



A5判／上製／函入
約700～800頁(予定)
各巻定価 5,995円
【既刊】『春』2022年2月【刊行予定】『夏』2022年5月31日/
『秋』2022年8月／『冬』2022年11月／『新年』2022年12月

角川俳句 大歳時記

春・夏・秋・冬・新年

角川書店編
編集委員
茨木和生
宇多喜代子
片山由美子
高野ムツオ
長谷川權
堀切実

圧倒的な季語数・例句数を誇る
俳句歳時記の最高峰、15年ぶりの大改訂!!



KADOKAWA

KADOKAWA公式サイト <https://www.kadokawa.co.jp/>

発行 株式会社KADOKAWA 〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3 『大歳時記』編集室 050-1744-2828

風 声

○俳句六月号——「クローズアップ——作品七句」欄

「城山」

網野月を

有り来たる戯れ合ふをどこ花に酔ふ

前割の芋の持て成し彼岸過ぐ

春愁や蕾の固さほどの罪

クラウドじやないんだよ心は胸に

花びらは蕊を抱きしめ花に雨

花の雨雲の向かふの桜島

噴煙や哥と見上ぐる春の虹

○俳句界六月号——「作品一〇句」欄

「みずゝ刈る」

五明 昇

幾曲りしても青田の千曲川

中山道韋駄天で行く青嵐

アルプスの伏流ここに水芭蕉

梅雨晴間上田紬の機音

白南風を捉へて速き木曾の駒

ひとひらがきりりと旨き洗練

飛騨見ゆる野麦峠の蟻の列

火の山へ黙禱長き登山隊

ケルン積む男に傾く稚児車

焼岳に火を放ちたる大西日

○現代俳句六月号——「現代俳句年鑑2022を読む」欄

川島一夫氏の感銘の一句として

薄氷や半濁音に割れてみる

網野月を

○現代俳句六月号——「現代俳句の風」欄

炎天に溶け込む女子の白ドレス

白ゆりや感染症科ナース室

雨蛙跳んで歩調の狂ひけり

稲荷祀る郭跡なる五月闇

○くちら（中尾公彦主宰）六月号——「受贈俳誌美術館」欄

彼の日のやうに心ときめく春の川

○草笛（太田土男代表）六月号——「受贈誌一詠」欄

啓蟄や漏水箇所を探す耳

○好日（高橋健文主宰）六月号——「受贈誌御礼」欄

人形に入魂の眼を冴返る

○新月（松田碧霞主宰）六月号——「受贈俳誌紹介」欄

出世頭をかこむ宴よ初桜

○太陽（吉原文音主宰）——六月号「受贈誌御礼」欄

人知れず文殻焚くや木の芽垣

○菜の花（伊藤政美主宰）六月号——「諸家近詠」欄

流れゆく雛のためらふ一の堰

○笹（山本一步主宰）六月号——「受贈誌の一句」欄

樹齢いま二千年余の冬芽かな

横山君夫（日高道を抄出）

後記

暑中お見舞い申し上げます。
 お上が緊急事態宣言解除、旅行助成等をはじめましたので、これですしもの新型コロナウイルスも終息すると、単純な私は思ってしまったかもしれません。そして「終らないコロナはない」と水明七月号の後記で大見得を切っていました。ところが、新型コロナウイルスも第七波となりこれまで一番の感染者の数となっていました。その上、サル痘とやらまで現れたといえます。

しかし、幸いな事に感染者の急拡大の一步手前の七月六日に、全国大会と九十周年記念祝賀会を催す事が出来ました。当日の予報は台風直撃と散々でしたが、開催出来るだけよしと思えました。ところが台風が俄にそれて、水明晴れになりました。昨年の大会は大雨が小雨から晴れになり、二年続けての水明晴れに、本当に驚きました。受賞者の方々は、輝いていら

つしやいました。が詳細は九月号をお楽しみに。
 季音雪欄の吉住光弥氏が亡くなられました。九八歳でした。五月二十日の発行所の「柿の木塾」には、傘をさして、皆の為に豆大福を持ち、二十分以上も歩いて参加されました。そして六月二十六日ずっと亡くなられました。信念を貫いた光弥氏の辛辣な句評が楽しかったです。どうぞ安らかに、合掌。
 会員の皆様に編集部からのお願ひがあります。
 今月号八九頁に訂正を掲載した「かづら橋」は、一般名詞と思っ

てしまい「かづら橋」に直してしまいました。本当に申し訳ございませんでした。頼りない編集子を助けると思つて、投句用紙の余白か裏に余り知られていない固有名詞は一言お書き添え頂ければ助かります。もつとも四国西祖谷のかづら橋は有名だと思えますが……。
 四回目のコロナのワクチン接種が始まりました。終りの見えないコロナとの戦いです。どうぞ、お気をつけて……。
 (節代)

今月のはてな？

- 翠巒 (すいらん)
- 徒骨 (むだぼね)
- 嘸 (おくび)
- 積恋雪関扇 (つもるこいゆきのせきと)
- 剩 (あまつさ) え
- 柳葉魚 (ししゃも)
- 暝 (くら) き
- 鯁 (たなご)
- 鹹 (しおか) らき
- 雨濯 (うたく)
- 哥 (あに)

88 77 71 ♪ 42 42 ♪ 39 23 21 19 頁

水明発行所受付時間
 (048-822-4741)
 曜日：(月・水・金)
 時間：12時半～午後4時半
 (火・木・土・日・祭日は休み)
 水明の行事と重なった時は休み
 (上記の時間には係がおりますので、
 ご用の方は 時間内にお願ひします。)

水明
 令和四年八月号
 通巻一〇三号
 令和四年八月一日発行

発行所 水明俳句会
 〒330-0064 さいたま市浦和区栗原四一〇二二
 電話 048-822-4741

ホームページ 水明俳句で検索

誌代	半年分	六、〇〇〇円
	一年分	一一、〇〇〇円
同人費 (誌代を含む)	一年分	二四、〇〇〇円
季音同人費 (誌代を含む)	一年分	三〇、〇〇〇円
振替	〇〇一七〇一〇一九三三九三	
発行人	山本 鬼之介	
印刷所	中央美版	

季音抄

山本鬼之介

母の日の胎内仏の中に入る
テールブルに映る空あり夏料理
庭木より高くは翔ばず梅雨の蝶
黴の書の表紙を化粧ふ丁子引
梅雨茸一客だけの京の宿
忌の近し此の道も又濃紫陽花
翡翠を待つ目印の杭一つ
翠巒を仰ぐ外洋つばめ魚
ドーランの女形に見せ場白牡丹
無住寺の闇の明滅螢飛ぶ
蜘蛛の巣の真珠光りや雨上り
形代の頬に紅刷き流しけり
初鰹遠州灘の器量よし
夏掛の魚と泳ぐ子の手足
打水や九尺二間の抛り所
嫁入りの舟に卯の花腐しかな
呼鈴や門前にゐるひきがへる
湧き水を守る万緑富士裾野

小倉倭子
栢尾さく子
菊池ひろこ
五明昇
境延昭
椎野美代子
井上燈女
丸山マシミ
鳥羽和風
森本早苗
梅澤佐江
松井由紀子
河野はるみ
野田静香
青木鶴城
日高道を
近藤徹平
大塚茂子

次の原稿を募ります。随時発行所宛、ふるってお寄せください。なお掲載については、編集部にお任せねがいます。

▼一句鑑賞

「水明」内外の最近の佳句を気軽に鑑賞してください。要領は、

二百字詰原稿用紙一句一枚以内
(句に雑誌名、句集名、刊行月を付す)

▼散歩道へ身辺トピック

読んで楽しい、ちかごろ身辺に起きた面白い話題、めずらしい経験などの情報をお寄せください。

要領は、

二百字詰原稿用紙一件一枚以内
(題をつけて)

▼山紫水明へ随筆

テーマ：自由

枚数：二百字詰原稿用紙五枚半

以内

水 明 抄

山本鬼之介

泰山木の花咲く庭に瞑想す
 卯の花腐し音楽堂へ続く傘
 フォルティッシモ磯笛を吹く鮑海女
 空五月太き棟木を揚げんとす
 通過貨車待つ踏切や夕薄暑
 烏賊を焼く女のうなじ夜店の灯
 虎が雨打ち棄てられし古人形
 見所は曲とのコラボ噴水ショー
 葉柳を眺めゆるりと潮来舟
 厳めしき修験の山ぞ岩清水
 着地せり忍びて百歩雲雀の巢
 夏めくや襟の黒子と夜会巻
 眼閉づれば体の中を若葉風
 麗しき少年の透く青簾
 満開の桜を散らし電車過ぐ
 ビルの谷間に卯の花腐し降りつづく
 紅き薔薇華やぎもどる西洋館
 さ緑の風の流るる更衣

山岸久美子
 村杉清吉
 反町 修
 横山君夫
 渋谷きいち
 染谷正信
 元田亮一
 越田栄子
 新 曆文
 丸屋詠子
 新井孝磨
 梅澤輝翠
 菅原真理
 小林京子
 本橋稀香
 千坂平通
 岡田宣子
 西幅公子

水明例会案内	句会名	日 時	会 場	指 導 者	幹 事
	第一例会	第1日曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10 F)	山本鬼之介	茂境 木和子 延昭
	第二例会	第3金曜・午後1時	本所ビッグシップ	網野月を	青木 鶴城 太田 絹映
	第三例会	第1月曜・午後1時	京橋区民会館	山本鬼之介	五明 昇 曲淵 徹雄
	第四例会	第1木曜・午後1時	浦和コミュニティ(セ) (パルコ・10 F)	椎野美代子	境延 昭 石井 喜恵
	第五例会	第3火曜・午後1時	水明発行所	山本鬼之介	梅澤 佐江 河野 はるみ
	若松例会	第1土曜・午後1時	京橋区民館	山本鬼之介	正木 萬蝶 石田 慶子
	関西例会	第3日曜・午後1時	守口市文化(セ)	大橋勉代	森本 早苗

水 明

令和四年八月一日発行 毎月一日発行

(第九十五卷 第八号)

定価 一〇〇〇円